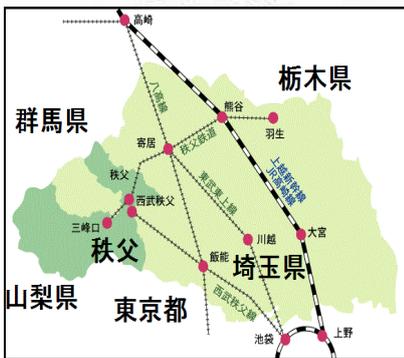


=====
秩父三十四観音 巡礼記

南無観世音菩薩 同行二人

=====



- はじめに
- 第一番「四萬部寺」
 - 第四番「金昌寺」
 - 第七番「法長寺」
 - 第十番「大慈寺」
 - 第十三番「慈眼寺」
 - 第十六番「西光寺」
 - 第十九番「龍石寺」
 - 第二十二番「童子堂」
 - 第二十五番「久昌寺」
 - 第二十八番「橋立堂」
 - 第三十一番「観音院」
 - 第三十四番「水潜寺」

- 第二番「真福寺」
- 第五番「語歌堂」
- 第八番「西善寺」
- 第十一番「常楽寺」
- 第十四番「今宮坊」
- 第十七番「定林寺」
- 第二十番「岩之上堂」
- 第二十三番「音楽寺」
- 第二十六番「円融寺」
- 第二十九番「長泉院」
- 第三十二番「法性寺」
- (附) 観世音菩薩^{へんげ}の変化

- 第三番「常泉寺」
- 第六番「ト雲寺」
- 第九番「明智寺」
- 第十二番「野坂寺」
- 第十五番「少林寺」
- 第十八番「神門寺」
- 第二十一番「観音寺」
- 第二十四番「法泉寺」
- 第二十七番「大淵寺」
- 第三十番「法雲寺」
- 第三十三番「菊水寺」
- おわりに

※ 「はじめに」の稿末の種字（梵字=サ）及び御真言は、秩父札所に多い本尊「聖観世音菩薩」のものである。また、各札所の項末にはそれぞれの本尊の御真言及び種字を付記した

寓多羅亭鈍助 述之

はじめに

昨夏（2017年）スイス・アルプスに登りに行って腰椎を骨折して以来、半年ほど寝たきり老人になっていたが、幸いなことに昨年末から少しずつ歩けるようになったので、お礼参りの意も含めて日本百観音霊場巡礼を発心し、今年（2018年）夏にその第一弾「坂東三十三観音」札所巡礼を結願した。

坂東三十三観音札所を廻ってはみたが前世の悪因、今生の悪行限りなく、当然のことながら瑞兆も御利益も顕れなかった。マ、信仰心皆無の輩には左様なことを期待すべくも無いことは理の当然であろう。

しかし、札所門前町の裏町の酒亭にはお布施をタンマリと弾んでおいたもので、その際には閻魔大王のお裁きも多少は弛むかと、閻魔様への般若湯のお布施も兼ねて第二弾の「秩父三十四観音」巡礼の旅に出ることにした。ご参考までに、前稿と重複するが、本邦の巡礼路の概要は下記のとおりである。

	寺数	巡礼距離・日数	所在都道府県	開創年代？
秩父三十四観音巡礼	34	100km 数日	埼玉県・秩父市、秩父郡	13世紀頃
西国三十三観音巡礼	33	1,000km 40日	三重を除く近畿6府県、岐阜県	8世紀頃
坂東三十三観音巡礼	33	1,300km ?	関東7都県（2018年8月結願）	12世紀頃
四国八十八カ所遍路	88	1,200km 55日	四国4県（2回結願）	9世紀頃
(参考)サンティアゴ・デ・コンポステーラ	礼拝堂 1堂のみ	800km 40日	スペイン (キリスト教3大巡礼地の一)	10世紀頃

さて、秩父三十四観音巡礼は、西国三十三観音巡礼や坂東三十三観音巡礼の秩父版として室町時代には既に開創されていたらしい。当初は他の観音巡礼と同じく三十三観音*であったが、都合により札所を一つ増やして（第2番「真福寺」）34札所としたのだそう。結願寺「第34番・水潜寺」は秩父市街から遙か北に離れた札立峠を越えた山中にあるが、この寺は秩父34観音詣だけでなく、坂東33、西国33観音も含めた100観音巡礼の総結願寺でもあり、また、この寺の観音堂前には百観音宝前の砂を納めたお砂踏みがあり、この上で拝めば全国百観音巡礼を行なったのと同じ功德が得られると信じられている。秩父観音巡礼は最後発の巡礼なので、それなりに集客の工夫が必要だったのである。

秩父三十四観音巡礼の巡礼路は時代とともに変化し、現在ではマイカーやバスで廻る人が殆どであるが、小生は歩き詣に拘って秩父観音巡礼が一番盛んだった江戸時代の巡礼道である「江戸巡礼古道」を採った。この古道は、埼玉県に残っている唯一の村である東秩父村から第一番札所に向けて巡礼を開始するものであるが、これは秩父観音巡礼入口を示す一番古い石碑が東秩父村に建っているからである。

現在の秩父巡礼は札所1番の四萬部寺から第一歩を踏み出すのが通例であるが、この江戸巡礼古道では、一番札所に至るまでに歩きで余分に1日を費やさなければならない。しかし、どうせやるならきっちり手順を踏んだ方が功德が多いのではなかろうかと、無駄な旅枕の夢を結んでみた次第。

さて、それでは秩父巡礼の旅に出よう。

ॐ अमोघ वैरोचन महामुद्रा मणि पद्म ज्वाल प्रवर्तय हूं

オン アロリキャ ソワカ（聖観音真言）

2018/08/30 発心、2019/01/08 結願



註)「三十三」観音*

観世音菩薩は、衆生済度のために33の姿に化身してこの俗世に垂迹されると言われている。それに因んで「三十三観音」、「三十三霊場」などの三十三が付く名称が生まれた。観世音菩薩の代表的な変化を稿末に記した。

第一番「誦経山 四萬部寺」 (秩父市)



「はじめに」でも触れたが、今回初めての秩父三十四観音詣では遠回りにはなるが“秩父巡礼江戸古道”を辿る歩き巡礼をコンセプトにしたので、第一番札所からのスタートではなく、江戸古道の江戸方面からの巡礼始点とされている東秩父村から第一番札所を目指してまずは前奏曲の部分歩き始めた。

東秩父村というのは、埼玉県で唯一残っている村制の山村で、東武東上線の小川町駅から日に二、三本しか無いバスで半時間ほど入った所にある人口3,000人に満たない過疎の村で面積の8割が山林であるが、1300年の歴史を持つ手漉き和紙で有名な村でユネスコ無形文化遺産にも指定されているそうだ。

その東秩父村の江戸方面からの入り口である「皆谷地蔵堂」という場所から標高700m程の峠を越えて10km、秩父盆地へ出る「^{かゆあらた}新田峠道」が秩父巡礼江戸古道の始まりであるそう。

皆谷地蔵堂には“右志^じゆんれい道”と刻まれた江戸古道最初の道標があるようで、確かに地蔵堂の横に2本の石碑が建っていたが、どれも刻字は傷んでいて、判読できなかった。



(最初に現れた巡礼道の道標。刻字は読めず)

皆谷地蔵から粥新田峠を越える道は人家もたまにしかない山中の道であったが、江戸古道の名残の馬頭尊や庚申塔なども諸処に残っている。ゆるい長閑な山道で、往古の秩父と江戸を結ぶ幹線であった。現在は舗装された車道になっているが、往時は駄馬や人足が荷を担いで通る往還だったのであろう。

諸処に休み場と呼ばれた平地もあって、そこには往時は茶店もあって繁盛したという。

(道中に建てられていた、
左・馬頭尊、右・庚申塔)



粥新田峠一帯の山は埼玉県営「秩父高原牧場」だそうで、広大な山林が草地に刈り取られていて牛の柵が張り巡らされていたが、牛の姿は見えなかった。今の時期は牛舎に集められて乳を搾られているのかも・・・。

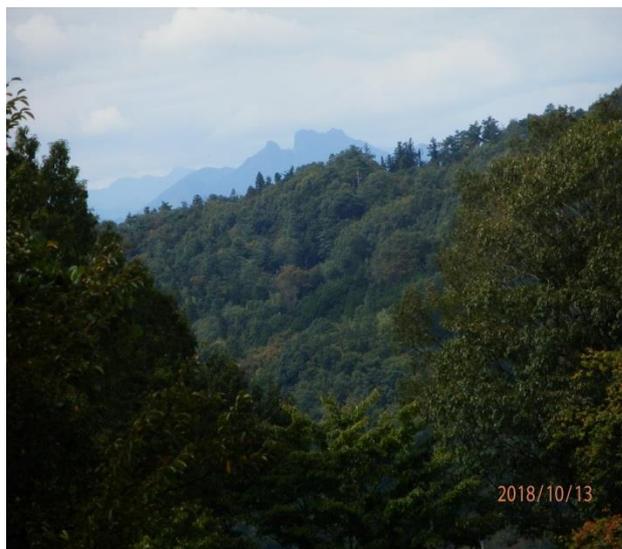
長閑な山道にはススキの穂が揺れて秋満開であった。道の上にはアケビの蔓がぶら下がっていて、如何にも美味そうな弾けたアケビの実がなっていたが残念ながら手が届かなかった。道の途中からは石灰石採掘で半分裸にされた武甲山や麓の秩父盆地が足下に望まれた。また、遠くには群馬県の妙義山と思われるギザギザピークも遠望できた。



(放牧場、牛に注意の古びた看板もあった)



(粥新田峠付近から見た武甲山(左)と秩父盆地)



(遠くに見えるギザギザピークは群馬県の妙義山か?)

粥新田峠を降って東秩父村から秩父市に入手前に曾根坂という峠があつて、そこには下のような一里塚の道標があつた。秩父三十四観音巡りの道しるべとして江戸の頃に建立された道標石で「心求・はまの道標石」と呼ばれている。ここでこの石碑に初めてお目に掛つた。「心求・はま」というのは秩父観音巡りの標石を数多く喜捨建立した横須賀生まれ江戸在の夫婦で、これから秩父観音札所を34番まで廻る時の道標としていつもお世話になる標石だそうだ。



(曾根坂・一里塚)



(南無阿弥陀仏 「心求・はま」の標石)



さて、道中の余談が長くなった。江戸巡礼古道の始点・東秩父村の「皆谷地藏堂」から歩き始めて4時間、曾根坂を下った直ぐの山里に秩父観音第一番札所「四萬部寺」はあった。山里と言っても、秩父の市街地から車で30分ほども山に入った深い山中であり、周辺にはこの寺の巡拝者を当てにした「旅籠一番」という古い門前宿と寺の補修工事などを請け負う土建屋が一軒あるだけの、通例の街中の遊興門前街とは程遠い佇まいであった。

冒頭の写真のように、この寺の本堂（観音堂）は大きな向拝が空に突き出していて、シャープに反った入母屋造りの瓦屋根の線は堂々として貫禄があった。元禄時代の建築で埼玉県指定有形文化財だそうだが、なるほどと思わせられた。観音堂は内陣まで入れるので御本尊「聖観音菩薩」を身近に拝顔できた。左立は「お助け観音」。外陣には賓頭盧尊者（おびんずるさま）が祀られていたので、腰と頭を撫でて腰椎骨折と瘋癲が治る祈願をしてきた。

観音堂の正面欄間に掲げられている必見と言われる「極楽之図」、「地獄之図」を眺めたが、彫刻がかなり古びていて図柄がよく分からなかった。マ、どちらにせよ極楽には小生は縁が無く、小生が閻魔大王やその手下の赤鬼・青鬼どもに血の池や針の山、火の車で苦しめられている図があると思われる地獄図の方にばかり眼が行くのであった。その気で見れば、地獄絵の方には火車や怖い鬼や骸骨や大蛇どもが瘦せた亡者をイジメている図があるが、他方の極楽絵の方には有り難いお釈迦さまや仏さまや蓮華の^{うてな}台や須弥山が描かれているようであった。この種の絵にはどこかに自分の姿もあるそうだから、眼を皿にしてご覧になればご自分の行く末も観えるのではなからうか。お布施を弾めば運が変わるかも・・・。



観音堂の隣には吹き抜けの大きな堂宇があった。施食殿という。この寺は、関東の三大“施餓鬼寺”と言われていて、毎年8月に大施餓鬼会を催すそうだ。宗派を問わず関東一円の僧侶や庶民が大勢集まって施餓鬼供養をするというので有名な。かつては30俵の米を炊き出して信者は言うに及ばず、乞食にまで施したという。そのために広い吹き抜けの施食殿を造り、中央の方形内陣には八角輪蔵が造ってあった。また他の寺に例を見ないほど広い2階建ての庫裏があったが、これも施餓鬼供養に訪れた信者の宿泊用の庫裏であったのかもしれない。



(施食殿、自動販売機がちょっと艶消し?)



(施食殿内陣の八角輪蔵)



(庫裏の立派な鬼瓦と「札所一番」瓦)

秩父三十四観音詣は現地泊の通し打ち一週間で廻る積りであるが、今回は様子見ということで、とりあえず一番札所「四萬部寺」のみを詣でて日帰りでレッドアロー号で帰宅した。般若湯は秩父ではどこも開店前だったので、途中の乗換駅の池袋でお布施をしたがこれでは御利益も期待できまい。

【誦経山 四萬部寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキヤ ソワカ

【御詠歌】ありがたや 一卷ならぬ法の^{のり}はな 数は四萬部の 寺のいにしへ

札

第二番「大棚山 真福寺」 (秩父市)

秩父巡礼の2回目は、2週間前に日帰りで詣でた初回の第一番四萬部寺の門前から歩き始め、秩父市東部の2、3、4番から横瀬町の5、6、7、8、9、10、11番を廻って再び秩父市街地に戻り、そのやや北側の17、18番に繋いで、秩父盆地の東半分を巡り終えたところで2回目を区切った。

秩父34観音巡りは全行程100km程の短い巡礼路であるから通し打ちでも1週間もあればアルキで廻れるのであるが、毎日が日曜日の身でも何かと用事が重なって今回は暇を縫った1泊2日の区切り打ちとした。

第一番四萬部寺から第二番真福寺に向かう道は長閑な山里の地道を降り、やがて急坂の林道を小1時間ほど辿って峠に出ると、そこに今は廃寺のように沈んだ無住の真福寺があった。かつては本堂、観音堂、礼堂、羅漢堂、仁王堂などの大伽藍であったそうだが万延元年の火災で焼失、今は明治時代末に再建された観音堂が残っているだけである。麓にある秩父谷随一の格式寺と言われる光明寺の末寺になっていて、納経もそこで受け付けていた。



(辺鄙な山上にある無住の第2番「大棚山真福寺」)

その昔、知行兼備の大棚禪師がこの地の岩窟に安置する観音像に暫々お参りする老婆あり、禪師あやしみてこの老婆に問えば、吾はこの里の農家の妻である。嫉妬心つよく強欲鬼畜の身を観音におすがりしてのがれたいと詣でている。観音は吾をわれみ本尊を祈り広く信仰を得ながら吾と同じ苦中の者も救われるであらうと伝えれば禪師はもつともなりと大棚の地に本尊を安置しようといふ。老婆は喜び、たづさえる竹枝を禪師に呈して「これは人間のものにあらず、これをもって今日の布施とす」と言い放すや松風吹の堂をたて永く観音の霊跡をしたと言ふ縁起があります。

昭和10年1月15日
秩父市教育委員会指定

市指定史跡 札所二番
大棚山 真福寺

この札所は昔、観音堂南向五箇半四面、ほか本堂、礼堂、仁王門、羅漢堂、稲荷社、諏訪社等があったといわれ、これらの建物は火災にあつて焼失し、須弥壇や彫刻の一部は取り出されて現在の堂に転用されておりますが、これらによつても昔時の盛観が偲ばれます。又、本尊は聖観世音立像一木造り、高さ六四釐で室町時代の作といわれております。

花桃と聖観世音

2018/10/28



秩父三十三観音札所には、どこの寺にも寺の縁起とそれを寫した説教絵が掲示されていて、ここ2番札所のものは上のようなものであった。絵には三千女というサインがあるが、どこも皆同じような絵柄の三千女作で些か食傷気味になる。

境内には山桜が2本ほどあって、時ならぬ狂い咲きなのか満開の花を咲かせていた。子供連れの家族が毛氈を敷いて弁当を拵っていたが、この寺の付近は早春には、参道の紅白の梅と花桃が咲き、桃源郷

のような景色になるそうで、なるほど狭くて暗い谷間を登り詰めた峠がいきなりパッと開けて下界を見下ろせるようになる境内は、往時の徳利と重箱をぶら下げた地元の住民の物見遊山の絶好の舞台だったのではなからうか。

猟犬を連れて何人ものハンターが境内の裏山に消えて行ったが、聞けば害獣駆除に駆り出された猟友会の人だそうで、増えすぎた鹿と猪を間引くのだそう。道に迷って藪に入ったら鹿と間違われて鉄砲でドンと打たれるかも知れん。 (広い境内では狂い咲き?の山桜が満開⇒)



山を下って麓の本寺・光明寺で納経し、近くの「ましお食堂」で生ビールで喉を潤し餃子と牡蛎フライの昼飯を喰った後、横瀬川を渡って次の3番札所「常泉寺」へ向かった。

札

【大榎山真福寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【ご詠歌】廻り来て 頼みをかけし大榎の 誓いも深き 谷川の水

(参詣日 2018/10/28)

(註) 冒頭の「はじめに」でも触れたが、秩父観音霊場も発足当初は33札所であった。それが、西国、坂東それぞれの33札所と合わせて切りの良い百札所を日本百観音霊場とすべく、最後発の秩父霊場に1札所を加えて全国百霊場とした。加えられた霊場が、この第2番「真福寺」である。

また、余談であるが、秩父霊場創建当初の札所番付(巡礼順)は現在とはかなり異なっていて、現在の第17番「定林寺」が当初の1番寺、現在の1番寺「四萬部寺」は当初は第24番であった。結願寺は当初も現在も「水潜寺」である。

番付が当初と異なって来た理由は、当初の巡礼者は主に秩父界隈の人であったが、江戸時代に入るに及んで江戸からの巡礼者が増えたので、江戸方面から廻り易い順番に番付が変更されたと言われている。江戸に一番近いのが当時の17番寺「四萬部寺」であったので、ここを1番寺に変更したのである。

因みに江戸以降現在の巡礼行程は、秩父盆地の江戸に近い北東部(第1番「四萬部寺」)から入って秩父盆地を巾着型に廻り、また北東部に戻って戻って第34番「水潜寺」から出て行く回遊ルートになっている。

第三番「岩本山 常泉寺」 (秩父市)



第3番「常泉寺」は秩父郊外の低い丘陵を背にした田圃の傍にあった。山里であるから車の喧噪もなく静かな山里のお寺であった。観音堂は境内の少し山の方に登った奥に建っていたが、それだけに何か静謐な佇まいであった。江戸後期の建築だそうだが、銅板葺の屋根の反り具合といい、大唐破風の向拝の重厚さといいきっと名工の作に違いない。向拝の欄間に彫られた龍の彫刻も繊細なもので、名匠の刀によるものだそう。

(中央奥が観音堂、手前右は本堂。廊下には子持石⇒)



本堂の廊下には寺宝「子持石」が祀られていて、子宝を望む夫婦が撫でて行くとか。マ、この石を撫でて帰りに秩父の湯にでも泊まって行けば、旅の恥は掻き捨てということもあるから、子宝も授かるのであろう。

秩父の観音札所では、「札所」を洒落て「補陀所」と言うらしい。「補陀落」とは観世音菩薩がお住まいになっている南インドの山のことであり、また日本では観世音菩薩が応現する所の謂いでもあるから、「補陀所」の方が本来なのかも知れない。





(第三番 補陀所)



(常泉寺本尊 聖観世音菩薩 お前立)

納経所には柿が置いてあって、ご自由にどうぞということだったので、丁度喉も乾いていたのでひとつ頂戴して門前の畦に座って齧ってみたが、何と渋柿であった。

柿も人を見て甘柿になったり渋柿になったりするのかも知れないナ。

たんまりと(?)お布施を弾んだのに、渋柿を喰わされるようでは、これは己の罪が相当に深いワイ。

無限地獄、我が六道の闇夜ナリ。

昭和40年1月25日
秩父市教育委員会指定

秩父のアジサイ寺

市指定史跡 札所三番
岩本山常泉寺

この札所は、三間四面、表に一間の大唐破風の向拝をふし、建築彫刻として繊細を極めています。特に竜の彫刻をほどこした向拝の海老虹梁のごぼりの細工は実に見事です。彫士は熊谷近くの玉井の住人飯田和泉と云われるもので明治三年、秩父神社の薬師堂を移築したもので江戸後期の建築物であります。本尊は聖観世音立像一木造り、像高九七三

不睡の石、子持石などの伝説を持っております。
その昔、この堂より北の矢行地に本尊が安置され、今の札堂の地に行基菩薩彫刻の十王像が安置されていたと云う。巡礼客十人あまりこの十王堂に宿り誦経し、その声は里人の心を打ち非常に喜ばれたと云う、折しも近くにある矢追の地より数千の征矢を射る如く光明が輝きこの地を照らし里人は驚いて十王堂に集まり例の巡礼者を見ると、いづこへか消えて矢行地にあるべき霊像が厳然と座している姿に驚き里人は矢行地の堂を矢追に移し永く当所に安置したと云う縁起があります。この縁起は当地の名主堀内家が常泉寺を建て、札所を移したことを物語っております。

【岩本山常泉寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】補陀落は 岩本寺と拝むべし 峰の松風 ひびく滝津瀬



第四番「高谷山 金昌寺」 (秩父市)



(紅葉が始まった金昌寺の観音堂と寄進された沢山の石仏群)

第3番「常泉寺」から再び横瀬川を渡り戻って半時間も歩くと第4番「金昌寺」である。

秩父 34 観音札所は一般的に観音堂だけというような小さな寺が多いが、この寺は境内も広く、大きな山門もあってなかなかの大寺であった。

また、山門に大きな草鞋が奉納されているのも、四国遍路では日常茶飯事であったが、坂東 33 観音札所では殆ど見掛けず、またこの秩父でも珍しいのではなかろうか。

この寺は全国に信者を持つ大寺で、江戸時代には関東のみならず全国の信者から寄進された石仏 1,300 体が所狭しと境内に置かれている。山門の二階にも沢山の石造観音像が祀られていた。



(大きな草鞋が奉納された山門)

また、この寺の本尊である伝行基菩薩作の十一面観世音菩薩木像（室町期）を石に刻んだ石像が堂宇の中に祀られていた。



（境内に所狭しと置かれた石仏群）



（十一面観世音菩薩石像）

石仏群の中には、酒で失敗した地元の名主が「もう酒は呑みませんからお許し下され」と誓って奉納したという「酒飲み地蔵」が愛嬌であった。酒樽の上に座って徳利と頭にかざした盃を嬉しそうに持っている酒呑みの像で、それを相撲取り4人が忌々しそうに支えている意匠であるが、なかなかユーモアがあった。隠し持っていた缶ビールをザックの底から取り出してお供えし、序に頭の盃を撫でて我が酒呑み人生の永きことを感謝し、これからも引き続き末永く呑ませて下されとお祈り申し上げた。オン カカカ ビサンマエイ ソワカ。

また、相当な年代を経たような千手十一面観世音菩薩の重厚な石像もあった。



（愛嬌たっぷりの酒飲み地蔵）



（重厚な千手十一面観世音菩薩）

沢山の石仏群の中で何と言っても圧巻は、乳児に乳を飲ませている慈母観世音菩薩であった。柔和な母子像が微笑ましい。伝によれば、吉野屋半左衛門という御仁が、この寺のご本尊の靈験で子供を授かったものの、その後子供と妻を相次いで失ったために、生前の母子の姿を浮世絵師に下絵を描かせて建立・供養した仏像である。当時は人前で子どもに授乳するようなことはしなかったそうだから、この御仁は我が妻と子の慈愛を殊の外慈しんでいたのであろう。

この寺には慈母観世音菩薩と対照的に、三途の河の入り口で亡者の衣服を剥ぎ取る役目の脱衣婆の不気味な石像も祀られていたので、それで六道のバランスが保たれているのかも知れない。



(柔和な慈母観世音菩薩)



(気味悪い脱衣婆)

門前には、秩父巡礼・江戸古道を示す「心求・はまの道標石」があった。「右三番 左古ばん」と刻まれていた。このような標石は、巡礼道を示す標として、秩父巡礼古道で至る所に置かれているものであるが、大抵は刻字が欠けたり苔蒸したりして読めないものが多い。

この標石は文字に白墨を入れて読み易く手入れされていた。「心求・はま」とは秩父巡礼古道に標石を設置した江戸の富豪信者夫婦である。



【高谷山 金昌寺】曹洞宗 本尊：十一面観世音菩薩 オン マカ キャロニキャ ソワカ
 【御詠歌】あらたかに 参りて拝む観世音 二世安楽と 誰も祈らん (参詣日 2018/10/28)

第五番「小川山 語歌堂」 (横瀬町)



第五番語歌堂は第四番金昌寺から歩 20 分ほどの野良道の際にあった。広い境内はかつては大寺だったろうと思わせたが、今は観音堂（鎌倉時代）と仁王門だけが残っている無住の静かな佇まいであった。納経は近くの長興寺で行われていた。

語歌堂とは変わった寺号であるが、その由来は右の絵のようなものだそう。絵解きにある孫八とはこの寺の檀徒であった本間孫八という地元の豪農だそう。

この寺は寺号が変わっているだけでなく、本尊も珍しい観音様で、種々ある観世音菩薩の中でも准胝観世音菩薩じゆんていと呼ばれる観音様である。この観音様は、心の迷い除け、厄除け、病気平癒、子授け、安産などの現世利益をもたらす観音様で、

本来は観音ではなく准胝仏母と呼ばれる菩薩の母であり、六道の闇夜では人間界を導く役目を仰せつかっているのだそう。一説によれば、ヒンドウのシヴァ神の女妃ドゥルガーとも言われている。このドゥルガー女神は美貌だそうだから是非ご尊顔を拝顔してみたいものだが、牙を剥いた悪魔でもあるそうだから、或いは本邦で言う「玉藻御前」古狐の同類かも知れない。あな、恐ろしや、恐ろしや。



准胝観世音菩薩は、現世ではマイナーな観音様のように滅多にお目に掛ることがない。これを本尊としている寺は西国・坂東・秩父の全国観音巡礼札所 100ヶ寺のなかでも、ここ秩父の語歌堂と西国の京都上醍醐寺の2寺しかない。因みに四国遍路 88 札所では皆無である。

准胝観世音菩薩は現世の御利益を授ける仏だから、その真言を毎日 108 回唱えれば寿命が 21 年間延びるのだそう。オン・シャレイ・シャレイ・ソンドイ・ソワカ。



(語歌堂の本尊 准胝観世音菩薩)



(京都上醍醐寺の本尊・准胝仏母尊の御影)

「扶桑（日本）唯一体」というのはやや大袈裟

この語歌堂の仁王門には、ユーモラスな風神雷神像が祀られていたので、下に掲げておく。



【小川山 語歌堂】 臨濟宗 本尊：准胝観世音菩薩 オン シャレイ シャレイ ソンドイ ソワカ
 【御詠歌】 父母の 恵みも深き語歌の堂 大慈大悲の 誓たのもし (参詣日 2018/10/28)

第六番「向陽山 ト雲寺」(横瀬町)



昨夜(10/28)泊まった「武甲の湯」を朝出て、本日はこの第6番から始めて8、11、10、18、17番と秩父札所の東部を廻って帰宅した。

武甲の湯からこの6番への道は、武甲の湯からそのまま横瀬川沿いに上がって行けば江戸古道に入るのであるが、ウロウロした挙句に変な農道に入ったりして半時間ほどロスしたが、里山の朝の散歩と思えばこれもまたよろし。天気も上々。ト雲寺は葡萄畑が続く山里のドン詰まりの高台にあり、目の前に武甲山が見えた。

武甲山頂の蔵王権現社内に安置されていた伝行基菩薩作の本尊の聖観音は、村人が「とが池」の大蛇を退散させるため祈願し、その靈験があったので「とが池」を埋めて草堂を建て萩野堂と称し、武甲山の尊像を安置したのがこの寺であるそう。別名、萩野堂。

また、寺宝である山姥の歯は、行基菩薩によって捕らえられた武甲山の山姥が、解き放たれた時に神仏に背かぬと誓いを立て歯を三本抜いて差し出したので、行基がそれに本尊を刻んで安置したという言い伝えが残っているそうだが、その山姥の歯を観る機会は無かった。

暇そうな住職が小生の菅笠と白衣姿を見て、「歩きですか？最近歩きは殆どありませんネエ。ご苦労様です。前の武甲山の下に見える大きな屋根が第8番西善寺ですよ。ここから30分ほどです。気を付けて行って下さい」と労ってくれた。

【向陽山 ト雲寺】曹洞宗 本尊：聖観世音

【御詠歌】初秋に 風吹き結ぶ萩の堂

宿かりに世の 夢ぞ覚めける

(参詣日 2018/10/29)



札

(ト雲寺付近からの武甲山)

第七番「青苔山 法長寺」(横瀬町)



ここに来る前に詣でた第9番「明智寺」からこの寺までは目の先であると聞いたので、何とか納経所が閉まるまでに廻ろうと駆け足で来たが、目の前に大きな寺の屋根は見えているのだが足元を隔てている横瀬川を渡る橋が見つからずウロウロしたので、息せき切って納経所に辿り着いたのは閉所時間ぎりぎり、納経所の扉を閉めつつあった住職に頼んで何とか納経させて貰った。

この寺の本堂は秩父随一の大きさを誇る堂々たるもので、平賀源内の設計だそう。かつては別に観音堂もあったが火災で焼失、観音堂を本堂の中に新しく建立した珍しい結構で、その中に焼失を免れた本尊の十一面観世音菩薩が祀られているそう。残念ながら夕闇が迫っていて本堂の中の様子は見えなかった。

御詠歌にある「牛伏」は、一説には、かつてここが牧場であった頃、牛が伏して動かなくなり、去った後から十一面観音像があらわれたことに由来しているらしい。



(牛伏の牛像)

本日のお詣りは此处までとし、夕闇の中を小一時間ほど歩いて「武甲の湯」に宿を求めた。武甲の湯は日帰り温泉であるが、別棟の離れの宿泊棟が7棟ほどあり宿泊自体は快適であったが、夕食が公衆浴場の休憩所であったので、些か温泉宿の興趣に欠けた。B&Bで7000円ナリ。

【青苔山 法長寺】曹洞宗 本尊：十一面観世音菩薩 オン マカ キャロニキャ ソワカ

【御詠歌】六道を 兼ねて巡りて拝むべし 又後の世を またのち 聞くも牛伏



(参詣日 2018/10/28)

第八番「清泰山 西善寺」(横瀬町) 附：羊山公園



6番のト雲寺からブラブラと里山風景を眺めながら、横瀬川と西武秩父線を渡って武甲山の麓にあるこの寺に参った。ト雲寺のすぐ下には昨夕納経ギリギリの時間に参った7番法長寺の大きな本堂の屋根が見えた。

この西善寺は天空に沢山の大きな枝を伸ばしたコミネカエデの巨木(県指定天然記念物)があるくらいで、他には印象が無かった。カエデは紅葉には未だ早かったが、盛期には見事なものであろう。

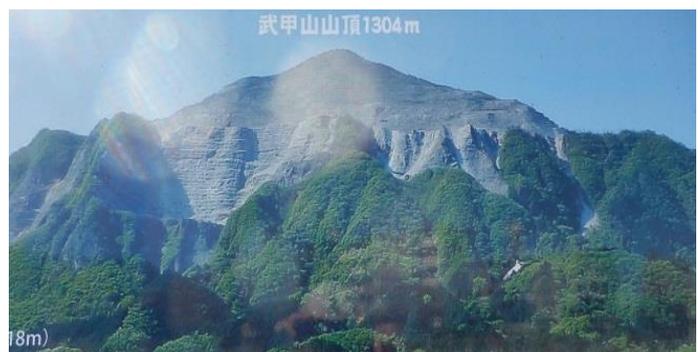
さて、この寺からは、武甲山の麓の山道を西武線沿いに1時間ほど歩いて秩父の名所である羊山公園に立ち寄った。

この武甲山の麓の道からは武甲山が目の前に眺められたが、石灰岩の採掘で山が半分ほど削り取られていて何とも痛々しかった。かつて2回ほど登ったことがあるが、山頂からも荒蕪たる採掘場が見えて殺風景であった。

羊山公園は武甲山の北側の山稜が秩父市街地に降り立った丘陵末端の秩父市と横瀬町の境にある広大な公園で、春には芝桜の満開で賑わうそうだ。公園の頂上からは秩父市街が一望に眺められた。



(コミネカエデの巨木)





(羊山公園から秩父市街を望む。左遠方は小鹿野の両神山)



(羊山公園の芝桜。後方は武甲山。看板写真)

羊山公園に立ち寄ったのは、ここに小さな美術館があり、棟方志功の板画が常時展示されていると聞いたからだった。志功の常設展示館は、以前には鎌倉山の志功のアトリエに併設された志功板画美術館があって拙宅からも近いので自転車でよく観に行ったものだったが、今は閉鎖されていて、残っているのは彼の故郷青森にある記念館だけであるから、ここ羊山公園の美術館は関東以西のファンにとっては貴重なものではなかろうか。

志功の板画が 30 点ほど展示され、また他に林武や熊谷守一の絵、河合寛次郎や浜田庄司の陶芸作品もあった。大財閥コレクションの美術館は別として、個人のコレクションの展示としては相当なものであろう。しかし、ロケーションが余り良くないのか、入館者は小生だけで、係の女性（1人だけ）も暇を持て余しているようだった。（下は展示されていた志功の作品。左＝天平妃の柵、右＝華狩頌）



【清泰山 西善寺】臨済宗 本尊：十一面観世音菩薩 オン マカ キャロニキャ ソワカ

【御詠歌】ただたのめ まことの時は西善寺 きたりむかへん 弥陀の三尊

(参詣日 2018/10/29)



第九番「明星山 明智寺」(横瀬町)



(西方浄土に折からの彩雲の瑞兆が顕れた明智寺)

第5番「語歌堂」から次の札所第6番「ト雲寺」を目指して歩いたのだが、途中で道を間違えて江戸古道の「心求・はま」の標を見失ったままロスポジションになった。大きな国道級の道路に突き当たったが、通っているのは車ばかりで道を聞こうにも人が歩いていない。だんだん日も暮れて来た。札所の納経所は夕方5時で閉まるので本日は此処までかと諦めかけていたら、道路の先に9番札所という道路標識が見えた。順打ちとは巡路の順番が違うことになるが、マ、どうせ物見遊山風情であるから、先に済ませられる所を先に廻ろうと大きな煙突が沢山建っているセメント工場か何かの大工場の横の坂を上って行ったら、そこは第9番「明智寺」であった。

この寺も語歌堂と同様に、広い境内に小さな観音堂と小さな庫裏があるだけのこじんまりとした静かな寺であった。観音堂は語歌堂と同じ時代に同じ大きさ・形式で建てられたが落雷で焼失、明治になって再建されたそうだが語歌堂のものよりかなり小さい感じがした。

恵心僧都の作といわれる如意輪観世音は、安産・子育ての観世音菩薩として知られ冬夏の縁日には女性の参詣者でにぎわうという。また、天正の頃、兵衛という少年が盲目の母親と観音堂にこもって一心に読経をしたところ、明け方に母親の目があいたことから、眼の病の治癒にもご利益があるといわれている。残念ながら日も暮れて来て観音堂の中も暗かったので、伝恵心僧都作の如意輪観世音菩薩のお姿は拝顔できなかつた。

【明星山 明智寺】臨済宗 本尊：如意輪観世音菩薩 オン・ハンドマ・シンダマニ・ジンバラ・ウン

【御詠歌】巡りきて その名を聞けば明智寺 心の月は くもらざるらん



第十番「萬松山 大慈寺」(横瀬町)



この寺は11番の常楽寺と山続きの反対側の麓の田園地帯にある。先に11番を廻って途中の飲食店(かわ伸)でビール2本と天婦羅盛り合わせの昼飯を喰ってから詣でた。

急な仁王門の石段の奥に本堂があり、その裏はすぐ山という閑静で長閑な境内であった。



【萬松山 大慈寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】ひたすらに 頼みをかけよ大慈寺 六の巷の 苦にかはるべし

(参詣日 2018/10/29)



次に詣でる寺は順番は異なるが、地図を見るとこの寺の山続きに「ふるさと歩道」というのがあり、その先に聖地公園というのがあって、その先には第 18 番の神門寺というのが記載されていたので、車道を歩くよりもこちらの方がよかろうと境内から裏山に入った。

途中、畑の畝や藪の中の獣道のような箇所もあって段々と怪しくなり、これはひょっとして深い山中に消えてしまう幻の道ではないかと淋しくなってきたが、やがて山中の大きな車道に出た。大きな車道ではあったが付近に集落は無く、車も人も全く通っていない。何やら淋しげで陰気な感じのする場所であった。聖地公園への標識を辿って行くと、そこは山を削った大きな霊園であった。「聖地」というから色々な宗教のモニュメントなどがある公園かと思ったが、そうではなかった。なるほど、淋しい感じがしたのも頷ける。付近には特別支援学校もあった。この両者は何の因果か同じ山奥にあることが多い。

人も車も全く通らない山中なので、18 番への道が全く分からず往生した。うろうろした挙句にやっと一軒家を見つけて道を聞き下界の 18 番に辿り着くことができた。

この霊園付近は、昔は馬の放牧場や猟場があったのであろうか。下のような珍しい石碑が建っていた。



(戦死馬記念碑)



(獵犬鳥獣慰霊塔)

第十一番「南石山 常楽寺」(秩父市)



市指定史跡札所十一番
南石山 常楽寺

元三大師
この札所は、江戸時代には観音堂、仁王門庫裡を備えた立派な寺でしたが、明治十一年秩父大火で類焼し一切を烏有に帰しました。
本尊は、十一面観世音で、ほかに釈迦如来もまつてあります。
その昔、この寺の住持、門海上人は、仁王門建立を志し、多年勸化に心をくだしましたが、善請なかばにして重い病となり、本願の達しがたいことを憂い、本尊に快氣を祈りしところ、ある夜黄面の老僧、金銅神を従いてあらわれ、「門海の病氣吾能治すべし」といい、金銅神に上人が肩を引立てられるところにて夢さめ、たちまちに病い全快し、仁王門建立の本願を遂げたという縁起があります。
またこの寺は明治初年までは天台宗の寺でした。比叡山中興の祖元三慈恵大師をおまつりし、曹洞宗になっても一月三日には大勢の参詣で賑わっております。
また四月二十日は本尊十一面観音の縁日と共に辰歳生、巳歳生守護本尊の普賢菩薩の縁日でこれまた賑わっております。

昭和40年1月25日 秩父市教育委員会指定



2018/10/29

羊山公園を降ったすぐ傍の高台にあった。秩父市街が一望。

【南石山 常楽寺】曹洞宗 本尊：十一面観世音菩薩 オン マカ キャロニキャ ソワカ
【御詠歌】 つみとがも 消えよと祈る坂ごおり 朝日はささで 夕日かがやく



第十二番「仏道山 野坂寺」(秩父市)

第3回目の札所巡りは、2回目に詣り残した秩父市街の第12番「野坂寺」から歩き始めて、東京からの西武鉄道秩父線と三峰口からの地元の秩父鉄道が秩父市街のド真ん中で出会う手前のアングル地帯にある26番「円融寺」、第27番「大淵寺」、第28番「橋立寺」、及び荒川上流部の川を越えたその対岸にある第25番「久昌寺」を廻ってきた。秩父盆地の南縁の丘陵の麓にある寺々である。

今回は山道ハイキング及び里山ウォーキングの軽い1日コースであった。



(野坂寺 重層楼門造りの山門)

第12番「野坂寺」は、西武秩父駅から町中を歩いて20分程の所にあった。広い桜並木の参道のすぐ先に堂々とした重層楼門造りの山門がどっしりと構えていた。桜並木の参道は春には桜花満開の極楽風情となることであろう。

この山門は白壁と黒の楼門のコントラストが美しい重層楼門造りであるが、祀ってある仏様もなかなか変わっていた。普通金剛像が祀ってある表の左右には怖い顔の閻魔大王や五道天輪王、中間には風神雷神雨神などが押し詰められて祀られ、その対の間には大牛に乗った観世音菩薩が祀られていた。



(閻魔大王 (中央))



(五道天輪王 (中央))



(左から、風神、雨神、雷神)



(大牛に乗る観世音菩薩、牛はかって20トンの牛車を引いていた実在の力牛で、この一木彫りも2トンだそう)

境内には十三仏尊像を祀る御堂があり、なかなかの盛観であったが、他に誰も居ないひっそりした仏間でこれらの仏様に一齊に見られると何か背中が薄ら寒くなって怖くなってきたのは、やはり脛に傷持つ身であるからであろう。オン アロリキャ ソワカ。



【仏道寺 野坂寺】臨済宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】 老いの身に 苦しきものは野坂寺 いま思い知れ 後の世の道

(参詣日 2018/11/28)



第十三番「旗下山 慈眼寺」(秩父市)

第4回目(日帰り)の巡拝は、秩父の街中に散在している第13番から第16番と、そこから北東へ歩約1時間の秩父大橋の袂にある第19番「龍石寺」まで歩いて、そこで荒川を対岸に渡り、第20番「岩之上堂」から荒川沿いに遡行して秩父ミュージックパークの北端にある第23番「音楽寺」まで巡り、今回はそこで打ち止めにして荒川を跨ぐ巨大な吊橋・秩父公園大橋を渡って秩父市街に戻った。



(黒塗りの薬医門と本堂 明治11年の秩父火災で焼失した本堂は第一番「六萬部寺」の本堂を模して再建されたもの)

この13番寺は、お花畑駅のすぐ近くの秩父市街の目抜き通りにあった。山門をくぐると右手に経蔵があり、経蔵の中央には一切経1600余巻が納められた輪蔵があって、これを廻すことで一切経の功德にあずかれる仕掛けになっているが、輪蔵が重くて廻せなかった。

鎌倉の長谷観音の経蔵輪蔵はこの寺の輪蔵より大規模なものであるが、これは軽々と廻せたり、普通の寺の輪蔵もよく廻るのであるが、この寺のそれはひょっとして、前世の悪因、今生の悪事多々の衆生には輪が廻らないように仕組まれているのかも……。或いは小生の喜捨が少なかったのか？

この寺は「め寺」と称されていて、眼病に御利益があるそう。その縁起はこの寺には「め」の仏様である瑠璃光薬師如来が祀ってあり、夏の「目」の縁日には眼病祈願の人びと、学業や仕事で「目が出る」ことを願う人びとが全国から参拝し境内には沢山の露店が並んで道路まではみ出しているそう。



(一切経1600余巻を納める輪蔵)

境内のメグスリの木から作ったメグスリノキ茶やメグスリノキ飴も寺の土産品となって納経所で売られていた。メグスリノキ茶のお接待に与ったが、果たして患っている白内障の御利益があるかどうか。

また、学業や仕事の「目が出る」は、今までに既に充分過ぎる程目が出たので（?!）もうこの歳で望むこともないから、丁重にお断りしてきた。

この寺の山門の前に建てられていた秩父札所案内標識⇒

秩父市街の目抜き通りにはこのような標識が完備されていて、情緒ある街の風景を醸し出していた。絵は秩父夜祭（世界遺産）の山車が刻まれている。慈眼寺付近は秩父夜祭の中心地である。秩父夜祭は秩父神社の例祭で、日本三大曳山祭のひとつ。

【旗下山 慈眼寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩
オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】御手に持つ ^{みて}蓮のははき残りなく
浮世の塵を ^{はちす}はけの下寺

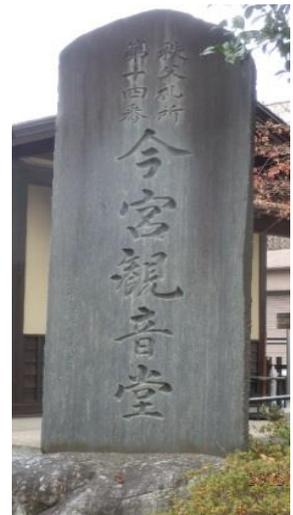
(参詣日 2018/12/08)



(豪華な秩父夜祭の山車)



第十四番「長岳山 今宮坊」(秩父市)



この寺も前の第13番「慈眼寺」と同じく秩父市街の住宅街のド真ん中であつた。広くも無い境内には観音堂と簡単な庫裏があるだけのひっそりとした寺だつた。近くには大きな今宮神社という鎮守の森があつたので、明治の廃仏毀釈で大きな今宮神社の境内からこの地に追いやられたのであろう。

かつては、「〇〇坊」という寺院は通例は「〇〇神社」の別当寺院であつたから、この今宮坊も繁盛していたに違いない。例えば、四国遍路札所第55番今治「南光坊」は日本の神社総本庁である大山祇神社(愛媛県大三島にある山の神、海の神、武の神)の別当寺であり、今でも豪壮な伽藍を誇っている。

寺の庫裏では、1週間前であつた秩父夜祭の後始末であろうか、近所のおばさん連中が集まって話し合いをしていた。

昭和40年1月25日 秩父市教育委員会指定

う縁起もあります。

びついに菩薩の像を得てこの地に安置したとい

像を刻まんとして雲中より大悲の像現れしを喜

本尊は、雲中出现の霊像と称され、弘法大師靈

ある見事な仏像です。

三纏跪座して雲にのる姿で曲線美に富んだ異色

このほか、市指定有形文化財飛天像は、像高三

七、七纏江戸初期の作です。

本尊は、聖観世音木造漆箔、半跏坐像で像高五

七、七纏江戸初期の作です。

輪廻塔

市指定史跡札所十四番

長岳山 今宮坊

この札所は、秩父札所

信仰に深い関係をもつ

た修験道場の大宗、今宮

坊があり、その中心的建

物は今宮神社でした。

本堂は、三間四面表流れの向拝、方形造りの建

築です。

2018/12/08



(今宮坊内陣 中央：本尊「聖観世音菩薩」、右：飛天像、左：不動明王)



(脇：不動明王)



(本尊：聖観世音菩薩)



(脇：曲線美に富んだ飛天像)



(今宮坊「観音靈驗記」 歌川広重・国貞筆画)

凡

【長岳山 今宮坊】臨濟宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】昔より 立つともしらぬ今宮に 参る心は 浄土なるらん (参詣日 2018/12/08)

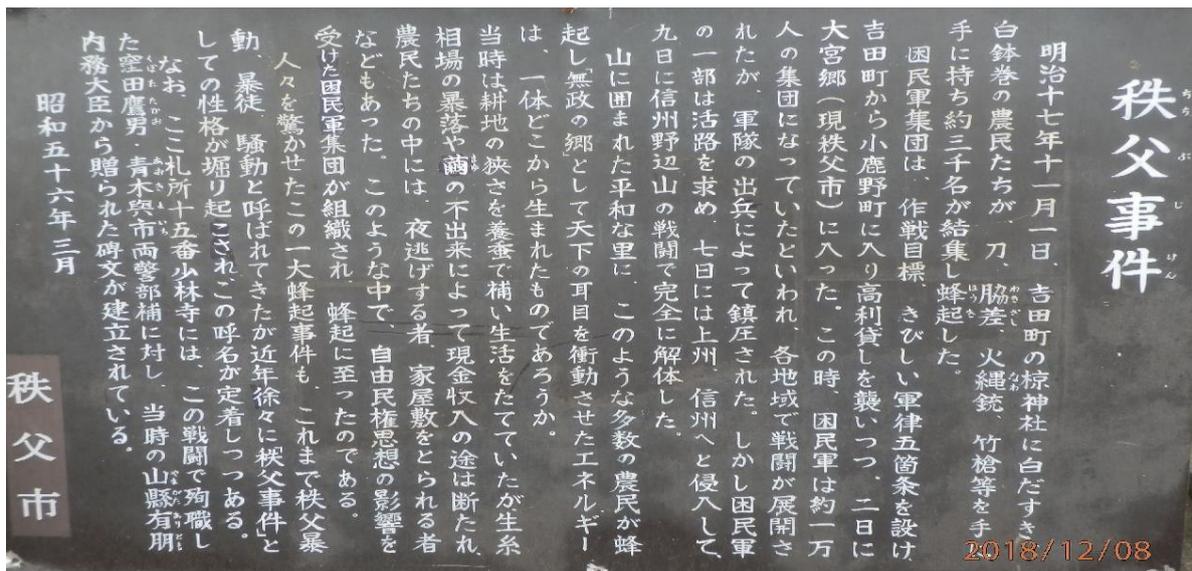
第十五番「母巢山 少林寺」(秩父市)



この寺の本堂はちょっと変わった姿である。白漆喰塗の蔵造りであるが、どことなく洋館を思わせる。明治時代の秩父大火での本堂焼失を教訓にして、火事に強い土蔵造りにしたのだそう。

また、下のような板碑もあった。秩父困民党事件は、当時の政府の経済失政により庶民が生活に困窮、特に養蚕を生業としていた秩父の農民は生糸の大暴落で夜逃げする者、家屋敷を取られる者などが続出、折からの自由民権運動の影響もあって秩父や近隣の農民約1万人が蜂起、高利貸しや官衙を襲撃した事件である。

この事件の板碑が何故この寺にあるのか分からないが、この寺の墓地にはこの事件で殉職した二人の警官の墓があるそうだから、或いはその縁かも知れない。蜂起した方も、それを取り締まる官憲の方もどちらも当時の世情の犠牲者であろう。



【母巢山 少林寺】臨濟宗 本尊：十一面観世音菩薩 オン マカ キャロニキャ ソワカ

【御詠歌】みどり子の ははその森の蔵福寺 ちちもろともに ちかひもらすな



第十六番「無量山 西光寺」(秩父市)



(本堂)



(本堂の欄間に掲げられている釈迦涅槃像)

秩父駅前的大通りを荒川方面に行き、荒川土手に掛る秩父公園大橋を渡る手前に 16 番寺はあった。山門を入るとすぐ右に、摸刻された四国遍路八十八札所の本尊を祀る長い回廊があった。これらの仏像と寺名を見比べながら回廊の中を歩くと以前巡った四国遍路札所の模様が彷彿と思い出された。この回廊を一巡すると四国八十八カ所を廻ったのと同じ功德が得られると言うから、観音菩薩の功德と弘法大師の御利益が同時に頂けるという寸法になっている。

また、境内の一隅には札堂という小御堂があって、昔はこの小御堂の天井や壁に木製の納札を打ち付けたそうだ。秩父の 34 札所で札堂が現在まで残っているのはこの寺だけだそう。

また、境内の他の一隅には酒樽大黒天も祀られていて、般若湯派には微笑ましかった。



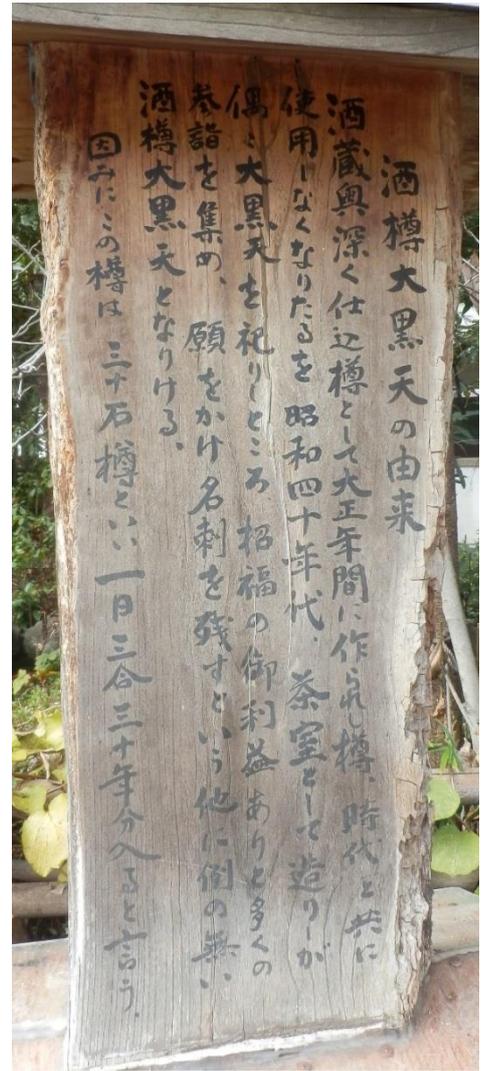
(四国八十八札所・回廊入口の額)



(秩父 34 札所中、唯一残っている札堂)



(酒樽大黒天)



(同 説明板)

【無量山 西光寺】真言宗 本尊：千手観世音菩薩 オン バザラ タラマ キリク ソワカ
 【御詠歌】西光寺 誓いを人に尋ぬれば ついの住家は ^{すみか} 西とこそ聞け

(参詣日 2018/12/08)



第十七番「実正山 定林寺」(秩父市)



夕暮れであったが、18番が終わってもう一つくらいは廻れそうな時間があったので、秩父駅への途中にあるこの17番「定林寺」に寄った。

ここの梵鐘には、西国・坂東・秩父の百観音札所の本尊と御詠歌が刻まれていて、その音の良さで秩父三名鐘と言われているそうだ。撞かせて頂いたが果たして鐘の音は如何にや？

今回の第2回目はここで打ち止めにして、バスで西武秩父駅に戻り、駅前の一杯飲み屋で観世音菩薩に般若湯を差し上げて、レッドアローで帰京した。(「そばぜん」、おかみ愛想ナシ)



【実正山 定林寺】曹洞宗 本尊：十一面観世音菩薩 オン マカ キャロニキャ ソワカ
【御詠歌】あらましお 思い定めし林寺 かねさきあへず ゆめぞさめける

(参詣日 2018/10/28)



第十八番「白道山 ^{こうどじ} 神門寺」(秩父市)



この寺には、第10番「大慈寺」に詣でた後にその裏山から「ふるさと歩道」なる山道に入り、途中「聖地公園」なる広大な丘陵霊園を抜けて平地に降りた所にあった。

国道に面しているとは思えないほどの静謐な寺であった。広くない境内には、観音堂の他に蓮華堂、不動堂などが建っていたが、どれも小さいながら重厚で格式ありそうな御堂であった。

観音堂の本陣の下には半地下式の回廊巡りが造られていて、本尊の真下には大日如来や虚空蔵菩薩が祀られていた。

本尊は聖観世音菩薩立像で、両手で蓮茎を持つ珍しいもの。室町時代の作。



市指定史跡 札所十八番

白道山 神門寺



聖観世音

この寺はもと修験寺で神戸山長生院といい今宮坊に属して栄えたといわれます。

円通伝にも堂六間四面とあり昔時の大いなるを偲ばせます。江戸中期寛政年間頃に焼

失し、その後観音堂のみ再建しました。今の堂は三間四面、小さいながら整った建築で天保の頃つくられたといわれます。当時この地方の名匠藤田家の末孫藤田若狭の手によるものと伝えられます。

本尊は、聖観世音立像で両手に蓮茎を持つ珍しいもので像高一〇二糎、室町時代の作といえます。

堂には元治元年郷土の生んだ森玄黄斎の揮毫彫刻になる扁額もあります。

その昔、ここは神社で大きい神があり、その枝左右に分かれて空に伸び結びあい、楼内に似たる故、神門と称したといえます。年を経て木も枯れ神社のすたれるみて里人はこれを再建せんと神託をうかがえばと不思議にも巫女を通じて寺にせよと言うお告げがあり、里人はここに大悲観世音を安置し、国家の安泰を祈り永久霊場にしたという縁起があります。

昭和40年1月25日

秩父市教育委員会指定

2018/10/29

【白道山 神門寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキヤ ソワカ

【御詠歌】ただための 六財ともに大悲をば 神門にたちて たすけたまえる

(参詣日 2018/10/29)



第十九番「飛淵山 龍石寺」(秩父市)



第19番「龍石寺」は、その前に巡拝した第16番「西光寺」から荒川の河岸段丘に出来た田園地帯を北東に歩くこと約1時間、秩父大橋の袂の小高い丘の岩盤上に建っていた。この岩盤は、荒川の浸蝕でできた河岸段丘上に露出した巨大な岩盤である。

さほど大きくない本堂であったが、均整のとれた銅板葺き・宝形屋根の大きな反り具合が美しかった。

本堂の横には小さな三途婆堂があつて、死者の衣を脱がせる奪衣婆と閻魔大王、賓頭盧尊者の三尊が祀られているそうだが、緞帳の陰に隠されていて見えなかった。

マ、御賓頭盧様は身体の痛い所を直して下さる有り難い仏様であるからしよちゅうお世話になっているので怖くはないが、奪衣婆と閻魔大王は脛に傷を持つ我が身は、できればお目に掛りたくない方々であるが、何故かこの奪衣婆は「子育て婆さん」として親しまれているようだ。



(↑左の小さな御堂が三途婆堂。

境内全てが大きな露出岩盤の上に載っている)

市指定史跡 札所十九番
飛淵山 龍石寺

堂内部

この札所は大きい一面の岩盤上に建てられています。七間半、四面表流れの向拝をふした方形造りの大きい観音堂です。
近年寺の荒廢を憂い広く淨財を募り、昭和四十七年改修復元が成り、その折宝永二年の墨書が発見されました。薄

町時代の作です。
昔、この地方に大早魁があり、弘法大師は天皇の勅により雨を祈られたところ、この大盤石二つに割れて、神泉苑より竜が昇天し、雲を呼びたちまちに雨降りおこり、人畜草木みなよみがえり大豊作を得たという縁起があります。

昭和40年1月25日 秩父市教育委員会指定



(絵詞が無いが、さて、これは何の縁起物語?)



(近くにあった「心求・はまの道標」。

「みぎ廿番」と彫ってある。20番は次の札所「法王山・岩之上堂」を指す)

【飛淵山 龍石寺】曹洞宗 本尊：千手観世音菩薩 オン バザラ タラマ キリク ソワカ

【御詠歌】天地を ^{あめつち}動かす程の龍石寺 詣る人には 利生あるべし

(参詣日 2018/12/08)



第二十番「法王山 岩之上堂」(秩父市)



第19番「龍石寺」を廻った後、秩父大橋の袂の中華屋で600円のビール1本と300円の餃子一皿の昼食を喰い、今は歩道専用橋上公園となっている旧秩父大橋を渡って荒川左岸に着いた。かつての江戸巡礼古道は、渡し舟で荒川を渡り、対岸の「乳水場」と呼ばれる湧水（この水を飲むと母乳の出が良くなるという）から荒川左岸の急崖を登ってこの寺の観音堂に至るものだったそうだが、今はこの急崖が崩れていて通れず「上の国道に迂回せよ」という案内板が出ていた。それで、この迂回の国道をズンズンと歩いて行ったがいつまで歩いても20番寺が現れず、行き過ぎて次の21番が現れた。半時間ほど行き過ぎていたが後日再訪するのも面倒なので、今来た道を引き返した。

引き返した所はこの寺の参道入り口で、参道はここから荒川の岸に向かって下る急坂となっていた。対岸には荒川右岸の町並みや山並みが足下に見えて、なかなかの景色だった。



(歩道専用橋・橋上公園、左奥の段丘の上に岩之上堂)



(参道入り口からの荒川対岸の景観)



(参道入り口から観音堂に降る道、庭園はよく手入れがされていた)

この20番「岩之上堂」は、観音堂が建っている大岩を大観岩と言い、その下に奥之院があったというから昔は修験の寺だったのであろう。前の19番「龍石寺」の境内と同様、全山が荒川河岸段丘に露出した大露岩の上である。

ここの観音堂は秩父では一番古い御堂だそうで年月に洗われた風格があった。本尊は聖観世音菩薩立像で藤原時代の秀作だそうだが、厨子の中が暗くて小さくて良く見えなかった。

また、この寺は札所には珍しく、江戸時代から今に続く旧家、内田家の個人所有だそう（現在16代目）。

よって、住職は居らず、今の当主も単に“寺守”とだけ称しているそう。ご朱印を呉れた由緒ありそうな人がその当主であろうか。

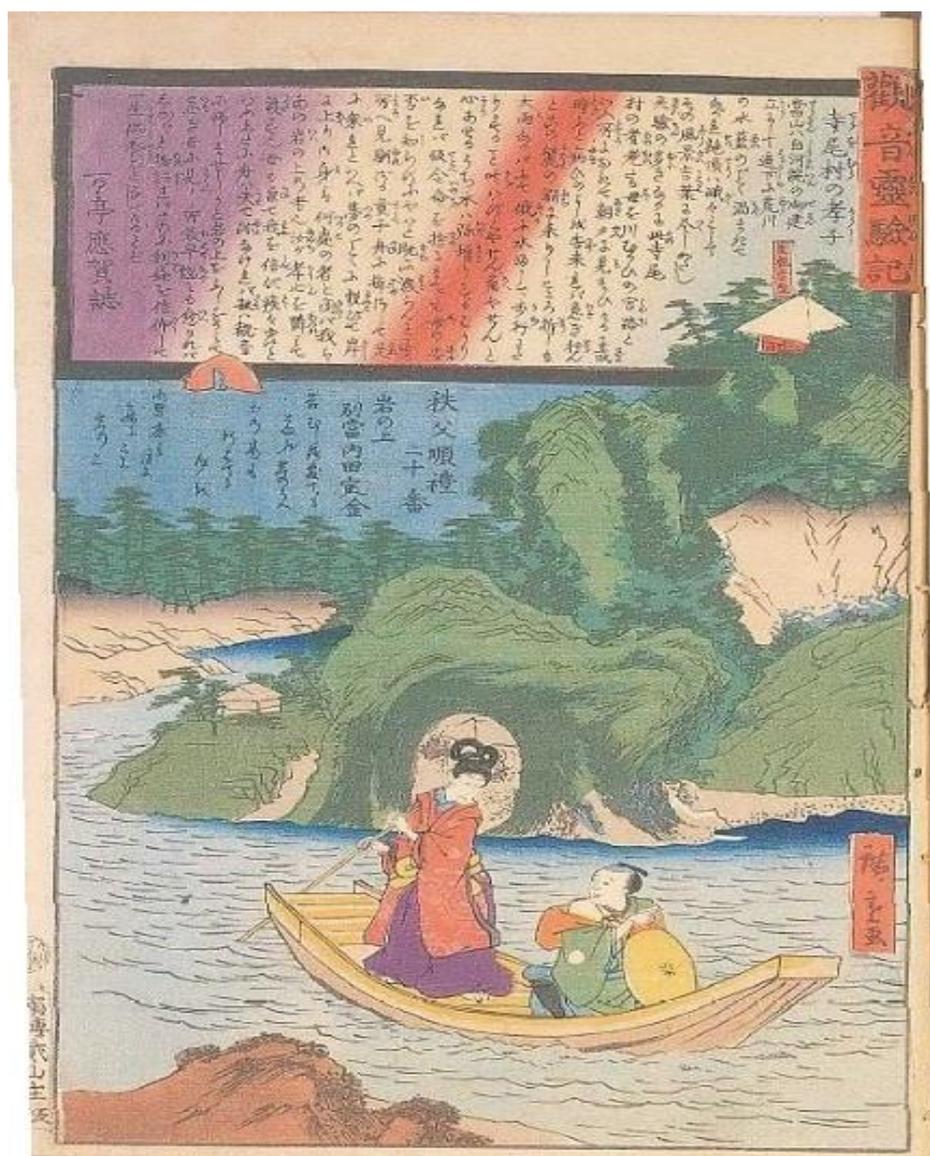
観音堂には花笠や猿子の櫻珞が沢山飾られていた。古裂と綿を使って子猿の形に縫い上げたものが天蓋一張に千個吊るされていて、千疋猿とも言われているそう。この寺の縁起（後述）には、“この地の人が実家の母の看病で荒川を渡ろうとしたが大水で舟がなくて困っていると、小舟に乗った子供が現れて渡してくれた。

それはこの寺の観音様が子供に姿をかえて助けてくれたのだ”という言い伝えがあるそうで、この子供は或いは子猿が化けたものだったということから千疋猿が飾られているのかもしれないが、やはり年月を閲した風格ある御堂には些か場違いの感があった。



この寺の観音靈驗記には、次のように記されている。

寺尾村の孝子・・・この寺尾村の者、老たる母を、川むかいの宮路という所におきて、朝夕に見まいけるに、或時、ふと病いのよしを告げ來たれば、急ぎ行んとこの麓の淵に来たりしところ、折しも大雨なかばにて、俄に水まして 歩行わたりすること叶はず、とやせん角やせんと心あせるうち、水は弥増りするばかりなれば、假令命を捨るまでも、母の安否を知らずにやにはと、既に渡らんとする所へ、見馴れざる童子、舟に棹さして是に乗れといへば、夢のごとくに悦びて岸に上り、御身は何處の者と聞けば、我はあの岩の上乃者なり、汝が孝心を憐みて渡すなり、母も兼て我を 信ず、疾々ゆけといふしたに、舟は失て跡なければ、扱は観音にましませしかと、岩の上を伏し拜みて、急ぎ母に 見し所、最早悩みも愈ければしかじかと物語れば、ともに利益を信仰して、一生供養をもなしけるとぞ。



(岩之上堂 観音靈驗記)

【法王山 岩之上堂】臨濟宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ
 【御詠歌】 苔むしろ しきてもとまれ岩の上 玉のうてなも くちはつる身を
 (参詣日 2018/12/08)



第二十一番「要光山 観音寺」(秩父市)



市指定史跡 札所二十一番
要光山 観音寺

この堂は、通称矢の堂
称し、本尊は聖観世音で他
に幾体かの仏像があります。
大正十二年小学校火災によ
り類焼後、今の堂がつくら
れました。焼失前は三間四
面の堂であったといわれ、
境内には聖観世音立像、百
萬遍念仏塔、弁財天石塔、芭蕉句碑等あり盛時が偲
ばれます。

堂前の道端には地芝居役者の座頭中村十九十郎
(田舎千両と称えられた)の墓もあって地芝居隆盛
の昔を偲ぶ民俗資料としても貴重です。

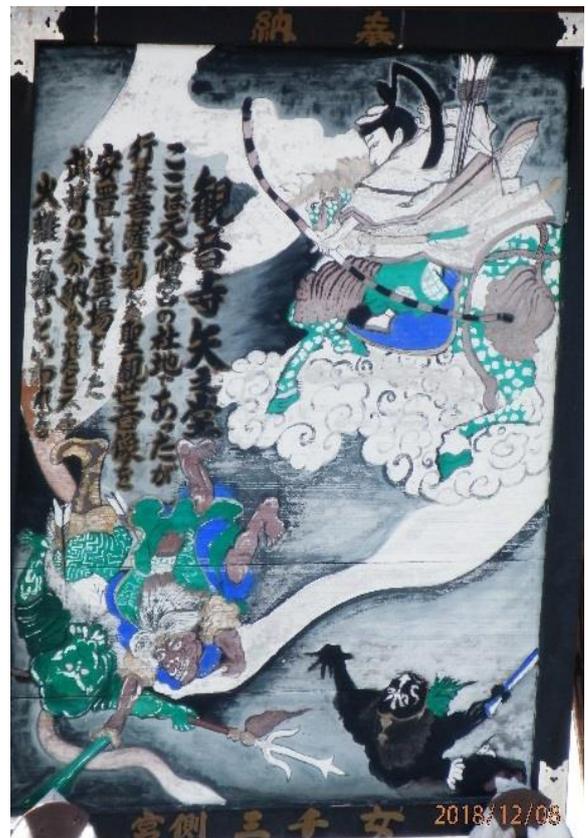
昔この地は、元八幡宮の社地で神託により観世
音の霊場になったといえます。

邪神悪魔を除き仏地にせんと八幡大菩薩の放て
る神矢がここに落ち、悪魔退散したため名づけ
て矢の堂をなすという縁起があります。

昭和40年1月25日 秩父市教育委員会指定

六地藏

2018/12/08



【要光山 観音寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩
オン アロリキヤ ソワカ

【御詠歌】 梓弓 いる矢の堂に詣で来て 願いし法のりにあたる嬉しさ
(参詣日 2018/12/08)



第二十二番「華台山 童子堂」(秩父市)



(童子寺の仁王門、奥右の四面御堂が観音堂。奥の大きな寺院は童子堂の親寺「永福寺」)

市指定史跡 札所二十二番

華台山 永福寺

2018/12/08

童顔の仁王さま

この堂は、童子堂と称し、府坂地内より現在の地、永田城跡に移したと伝えられ、近くに城の堀跡が今も現存しております。

四注屋根三間四面で周囲に

勾欄付の椽をつけ、欄間や扉には薄肉彫り淡彩の彫刻があります。山門の仁王門は、童子仁王といい稚拙であるが愛嬌のあるもので童子の名にふさわしい仁王門です。

本尊は、聖観世音がまつられております。

この堂は、淳和天皇の御弟、三品式部卿伊豫親王の菩提のため遍照僧正がこの領主に命じて草創したものと いわれます。

昔讃岐に怪貪な長者があつて行脚の僧長者に食を乞えども与えられず、僧は金を払いて米を求め犬に与えれば、この家の倅、犬となり共に喰ひいる様に親は驚き悲しみ大きく、長者は僧に因果の道理を説かれ、その犬を引いて諸国の霊場を廻り当山に来て始めて元の人間になったという縁起があります。

昭和40年1月25日 秩父市教育委員会指定

22番「童子堂」は、その前の21番「観音寺」から大きな幹線道路を歩いて半時間の荒川左岸の洪積台地の畑の中にあった。何とものんびりした田舎の鄙の寺であったが、秩父の寺院には珍しい茅葺のどっしりとした仁王門が貫録を示していた。

この寺の珍しい堂号の由来は、昔子供たちの間に疱瘡が流行った時、山奥に祀られていた観音を拝して祈念し、岩間より生ずる清水で洗ったところ病がたちどころに消え失せた。この観音を本尊として山麓のこの地に移して祀ったのがこの寺の由来であると伝えている。

仁王門の仁王は童子仁王と呼ばれていて、ひょうきんな童子の姿をしているのが愛嬌であった。



また、寺伝によれば下のような縁起もあるらしい。前頁の表示板の末節も参照されたい。



【華台山 童子堂】真言宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキヤ ソワカ

【御詠歌】極樂を ここで見つけて童^{わら}う堂 後の世までも たのもしきかな

(参詣日 2018/12/08)



第二十三番「松風山 音楽寺」(秩父市)



一つ前の札所「童子堂」の山門を出た所で、散歩中のオジイサンに出会った。これから23番さんへ参るのかと聞くからそうだと応えると、登り坂がちょっとキツイが、マ、貴方の足なら20分で御の字だヨ、ワシもその近くまで散歩に行くから道案内をイタそうという有り難いお言葉。

ところがドッコイ、このオジイサンの足の速いこと速いこと。付いて行くと直ぐに秩父ミュージックパークに登る車道をショートカットする急な登りの山道が現れて当方は息が切れた。このオジイサンは分岐点の要所要所で小生を待っていて誘導してくれた。歳は90歳を越えているようにお見受けしたが、全く息も切らしておらず、平気の平左で歩いて行かれた。羨ましい限り。

“20分で御の字”というオジイサンの言は小生の足では1時間近く掛ったが、秩父ミュージックパークという森林公園の中の初冬の落ち葉の絨毯を歩く感触はこれまた結構なものであった。この絨毯道が終わった所に庫裏があり、その裏山に観音堂が建っていた。観音堂への階段がキツかったが、これを補うかのように観音堂からは秩父市街が一望でき、暮れなずむ盆地には霧が掛かり始めていた。

秩父は内陸の盆地であるために春秋には盆地霧による雲海が見えることで有名である。この観音堂も秩父雲海見物の絶好のポイントの一つだそうで、最盛期には下のような雲海の景色が見えるのだそう。

左下の斜張橋は ⇒
秩父市街から荒川を
渡って秩父ミュージック
パーク方面に至る
秩父公園大橋。
中央奥のピラミッド
は武甲山。
右の灯りが秩父市街。



話が横道に逸れたが、この寺の寺号「音楽寺」もちよっと珍しいものであろう。由来によれば、秩父札所を開創した十三人権者（後述、ご参考）がこの山の松風の音を聴いた時、菩薩の奏でる音楽と感じたからと言われている。音楽を志す人たちが訪れ、願いをかける姿を目にすることも多いそうだ。

また、この寺には次のような縁起もある。

この土地の親孝行の武士が主君から出陣を命ぜられ、老母一人を残して出陣しなければならないことを深く嘆いていたが、その老母は息子に守佛を与えて、母を思う時はこの守佛を懐から出して南無大慈大悲と唱えよ、さすれば勝利して無事戻って来られるであろうと送り出した。お蔭でその武士は戦勲を立てて無事帰還したが、その守佛は実はこの音楽寺の観音様であったそうで、老母もろともに出家して観音を供養したという。

また、武装蜂起した秩父困民党の農民 3000 人が小鹿坂峠を越えてこの寺に集結、梵鐘を乱打して大宮郷（現秩父市街）に乱入したことで知られている。

畠山基国の家来 内山源蔵

當山は、慈覚大師此処に堂宇を建て給ふ時、余多の小男鹿來つて、道の案内をせしゆへ小鹿坂といへり。誠に絶景の地にて、靈驗も又あまたあるなかに、畠山基国の家来、内山源蔵は観音をよく信じける時に、大内介義弘の討手を、基国命ぜられたれば、源蔵も出陣の役にあたり、武門の面目とはいいいながら、七十にちかき老母に離るゝことを深くなげきければ、老母はこれをいさめていうよう、この守佛は秩父音楽寺の御影なり。これを懐中して母をおもふときは南無大慈大悲と唱へよ、必ず勝利あるべしと渡しければ、よろこびて兜のうちにさめ出陣せし処、この守のおかげにや、危き矢さき剣先をのがれ、終に義弘敗軍におよび、基国勝利を得て凱陣のうへにて、源蔵は功成り名をとげて身を退き、母もろともに出家となりて、観音を供養せしに、なお靈驗を蒙れりとなり。

（音楽寺「観音靈驗記」 歌川広重・国貞筆 ⇒）



[ご参考]

秩父観音巡礼「十三権者」と秩父観音巡礼札所

縁起によると、文暦元年（1234）に、閻魔大王・俱生神・花山法王・性空上人・春日開山医王上人・白河法王・長谷徳道上人・良忠僧都・通観法印・善光寺如来・妙見大菩薩・蔵王権現・熊野権現の十三権者が、秩父の魔を破って巡礼したのが始まりという。

現存最古の資料は、法性寺蔵「長享二年（1488）秩父観音札所番付」であり、大柵観音が欠けた三十三所で、番付は定林寺から始まる。これは、現在の秩父市中心部にあたる大宮郷の人々を対象としたものだったことを示している。十五世紀初め、大柵観音が加わることを主張して

三十四所となり、その打開策として日本百観音巡礼を提唱し始めた。江戸時代に入って、札所番付を江戸向きにすることにより、我が国を代表する巡礼の一つになる。開創から江戸期までは修験者が中心だったが、その後は禅宗寺院が札所を支配し始めて、現在の形態になっていった。また、江戸時代中期ごろから、総開帳や江戸での出開帳が見られるようになり、現在も午歳総開帳がおこなわれている。

以上を表わす霊験記は下のとおり。



当初の予定では、この日はこの音楽寺から江戸巡礼古道「長尾根道」を1時間ばかり辿った次の札所・第24番「法泉寺」まで足を伸ばすことにしていたが、途中で見過ごした寺への逆戻りなどをしていて関係で納経所閉鎖時刻の16時までには辿り着けなくなって、この日は音楽寺を打ち止め寺としてトボトボと山を下って秩父公園大橋を渡って秩父市街に戻った。歩いて1時間半掛った。今日は朝の9時から夕方16時半まで8時間近く歩きずめであったので、平地歩きが多かったとはいえ草臥れ申した。

秩父市街に戻って、般若湯の功德を積むためにちょっと一杯供奉を施した。たまたま昨日のTVで放映されていた店を探して入った。この店は有名人が大勢訪れる店だそうで、お花畑駅の近くにあった。昨日のTVでは演歌歌手の伍代夏子が出ていた。古めかしくてちょっと汚い？食堂であったが、建物が重要文化財に指定されているような。先々代がカフェを開いたのが今は食堂になっているようだ。

年寄りのご主人と猫2匹がやっているごく普通の一膳飯屋という風情であったが、安くて美味しいと言われるオムライスはたった 750 円でオムライスの他にフルーツ盛り合わせも沢山盛られたワンプレートで誠に結構であった。ご主人も人徳が溢れたような方とお見受けした。猫2匹はトラ猫で、一匹は後ろ足で立ち上がって石油ストーブの外枠に前足を掛けた立ち姿で気持ち良さそうに暖をとっていた。もう一匹の方は人見知りするのか椅子の下に隠れていた。

秩父に行かれた際には立ち寄られることをお勧めしたい。「パリー」、秩父鉄道「お花畑駅」歩5分。



(入口は古びて汚らしいが、味ともてなしは絶品)



【松風山 音楽寺】臨済宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】音楽のみ声なりけり小鹿坂の 調べにかよう 峰の松風

(参詣日 2018/12/08)



第二十四番「光智山 法泉寺」(秩父市)



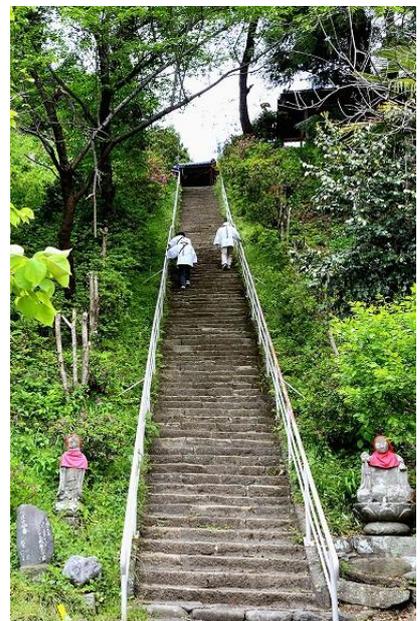
第5回目の区切り打ちは、この第24番「法泉寺」から前々回参った第25番「久昌寺」の手前まで荒川左岸の長尾根山麓の田園地帯を歩き、久那橋で荒川右岸に戻って武甲山西麓の29番「長泉院」、三峰口近くの第30番「法雲寺」に詣り、一旦秩父市街に戻ってホテルに宿泊した後、翌日は関東山地を越えて小鹿野の第31番「観音院」まで足を延ばした。

さて、その最初の法泉寺。荒川に掛る真っ赤な巴川橋を渡って少し県道を歩くと、道路から一気に急な石段の参道があった。往古から多くの信者や観音巡礼の足で踏まれてすり減った急な116段の石段は、恥ずかしながら手摺に掴まって途中で何回も休み休み登らないと登り切れなかった。いくら後期高齢を1歳上回ったロートルの身とは言え、かつては都岳連（東京都山岳連盟）遭難対策委員会専門委員として鳴らしたトップ・クライマー？を

自認するワタシ奴としては、いくら腰椎骨折の痛み上がりであるとは言え、何ボ何デモこれではチト恥ずかし過ぎるではないか。ああ、情けない。

マ、余談はさて置き。

寺伝によれば、その昔、この寺の観音様を信仰し修行の衆に施しをしていた武州恋ヶ窪遊郭の慈悲深い遊女が或る時口中の痛みで苦しんでいた時、通りかかった僧がこれで口を漱げば痛みが無くなると一本



の楊枝を差し出した。遊女が早速口を漱ぐと痛みが去った。これを奇瑞として、かつては口中の痛みに
 靈験ありという楊枝をこの寺で売っていたという。この遊女が信仰していた観音様は、座高一尺、宋朝
 風の美しい聖観世音菩薩で室町時代の作であるそう。



(恋ヶ窪の遊女、楊枝で口を漱ぐ。当時の楊枝は今と違って

(当寺の聖観世音菩薩)

歯ブラシ様の物であったことが分かる。「観音靈験記」より。 以上2枚、どこかのHPから無断引用)

また、冒頭の観音堂の写真では少し見えにくいですが、この観音堂には左右に回廊状の張り出しが付いて
 いて、その張り出した唐戸の部分に阿吽二体の仁王像が祀ってある。即ち観音堂と仁王堂を合体した非
 常に珍しい本堂であるそう。江戸中期の建築。

御詠歌にある「雪の白山」は、加賀白山の著名な修験僧であった泰澄大師が或る時この地に至って天
 照大神と白山姫ノ神を感得し、この寺を開いたという縁起に拠る。伊勢信仰（天照大神）に白山信仰が
 加わった形態であるという。

この寺は無住で、近在の品の良いご婦人が納経所に詰めておられた。

この寺からは、旧坂の裏山集落の中を「酒づくりの森」という酒蔵経由で長尾根山麓の田園地帯を歩
 き、久那橋で荒川右岸に戻って武甲山西麓の29番「長泉院」に向かった。

【光智山 法泉寺】臨済宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキヤ ソワカ

【御詠歌】天照す 神の母祖の色かへて なおもふりぬる 雪の白山

(参詣日：2018/12/27)





(第 24 番「法泉寺」から第 29 番「長泉院」に向かう途中の荒川に架かる久那橋から深紅の巴川橋を望む)

巴川橋の左袂奥が先程参って来た法泉寺、また巴川橋アーチ奥に見える稜線上の鞍部の手前下に第 1 番「四萬部寺」があり、そこから先は東秩父村となって小川町に繋がっている。この鞍部が粥新田峠で、江戸から秩父に入る江戸巡礼古道の入り口の峠となっている（第一番「四萬部寺」の項参照）。

序ながら、江戸巡礼古道による秩父三十四観音巡礼の行程は、江戸から出発して往時の都幾川村から東秩父村を通過して粥新田峠もしくは定峰峠を越えて秩父盆地に降り、秩父盆地の北側から巡礼をスタートして盆地の東側の寺々を南側に第 1 番「四萬部寺」から第 12 番「野坂寺」まで廻り、そこから市街地に入って北上して第 19 番「龍石寺」まで巡礼した後、荒川を渡って対岸の丘陵を第 25 番「久昌寺」まで再南下した後、再度荒川を渡り戻して武甲山北西山麓の第 26 番「円融寺」から第 30 番「法雲寺」に至り、そこから三峰口、関東山地を越えて小鹿野に出て第 31 番「観音院」から北上して 32 番「法性寺」、33 番「菊水寺」、第 34 番の「水潜寺」で結願するという約 100km の巡礼路である。満願の後の帰路は、往路と同じ粥新田峠を越えて東秩父村経由で江戸に戻るか、或いは長瀬方面に遊行の足を延ばした余裕ある巡礼も居たことであろう。

いずれにしても、江戸巡礼古道は秩父盆地の北側の盆縁から盆の底に入って盆地内をグルリと一巡し、再び北側の盆縁から盆を出て江戸に戻って行くというルートであった。

第 32 番「法性寺」に残っている室町時代の秩父札所番付によれば、当時の第一番札所は秩父のど真ん中にある今の第 17 番「定林寺」だったそうで、この頃は未だ秩父在の巡礼衆が多かったのであろう。それが江戸時代に入ってから江戸からの巡礼衆が増えて、そのため江戸から廻って来るのに便利なように番付の順序を変えて行ったのであろう。即ち、江戸から一番近くに位置している「四萬部寺」が一番寺となったのであろう。

第二十五番「岩谷山 久昌寺」(秩父市)



(久昌寺山門 奥は観音堂)

先に廻った第28番「橋立堂」から荒川上流部に掛る久那大橋という橋を渡った対岸にあるこの寺迄約半時間、長閑な丘陵の道を歩いた。この寺は後述の「御手判石」が寺宝であることから、別名「御手判寺」とも呼ばれている。

山門からは長い石垣が積まれており、また境内は弁天池という大きな蓮池もある広大な境内で、かつては沢山の伽藍があった大寺であったことを思わせる。

雪の降った朝等、池の奥の境内からは、手前には弁天池の鏡面、その先の観音堂の山越に雪の武甲山が望まれて一幅の名画になるそうだ。



市指定史跡 札所二十五番
岩谷山 久昌寺



御手判石

この札所は通称御手判寺
といひます。この由来は播州
書写山の性空上人、秩父巡拝
の折、閻魔大王から贈られた
石の手判を当寺に納めたとい
う。これにちなんで御手判寺ともいふのである。

堂は三間四面、表流れの向拝をふした方形造りで堂内
には宮殿形の厨子がおいてあります。本尊は聖観世音立
像一木造り像高五六厘室町時代の作といわれます。

その昔、上ノ山奥野の女、心荒く父母親類縁者にも疎み
果てられ、自ら懐胎の身ながらも追いたてられ久那の岩
洞に住み、鬼女如く振るまい里人に恐れられていました。

女の子生まれて母に似ず神仏を尊び里人の助けによ
り、旅僧の持ちし観音像をまつり、母没後の菩提のために
この地を霊地にしたという、これが寺の草創である。

昭和40年1月25日 秩父市教育委員会指定

この寺の縁起は上の看板のとおり、「昔、欲深な女が山に籠って悪業をかさねていた。村人は、思い余って女を荒川に投げ入れたが、女は一命を取り留め、その後一人の女の子を出産した。生まれた女の子は親に似ず美しい心の持ち主で、旅僧の持っていた観音様を祀って御堂を建て、母の菩提を弔った。これが久昌寺の縁起である」と伝えられている（奥野の鬼女伝説）。

江戸時代の浮世絵師歌川広重・国貞の筆になる「観音霊験記」のこの寺の項には、右のような絵が描かれていて、上段には広大な境内の様子が（山は武甲山か?）、また下段には上の鬼女伝説がおどろおどろしく描かれている。

絵が小さくて読みづらいが、下段の鬼伝説の詞書には次のように書かれている。

奥野の鬼女

昔往、久那の岩洞に鬼こもれりとて、さらに往来するものなき来由は、奥野という一処にすむ女房、大悪のものなれば、懐胎の身にて、一類に見放されて家を出され、此所の麓に住みけるが、猶悪計のことありて荒川へ打込まれしが、からき命を助りて、又この山ふかくに忍び居て一女を産む。

この娘十五歳の時宿業尽しにや、身罷りければ、娘は 殊更嘆きにしづみし所へ、弱かなる女人手に花を持っていうよう、汝が母は後世地獄に墮せり、夫を助けたくば観世音の御吊を唱へて祈念せよと教ゆ。また象殿の神あらわれて告げ給ふには、今一人の旅僧爰に来たれば、それに値偶して

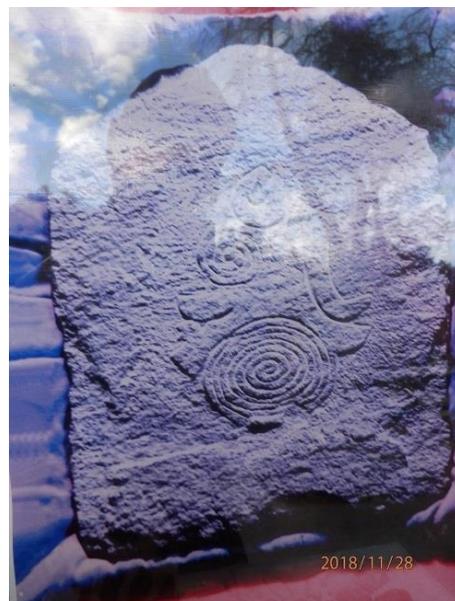


里人を語らひ、此地に観音の堂を建てよとありしに、果して、一人の旅僧來れば、始終を語りて頼みければ、僧は娘をつれて里へ出て、しづしづと語て勸化すれば、その鬼女の一類および里人も力を合せて、間もなく堂舎ととのひければ、僧の持し観音を本尊とし、又十王の像を作りて鬼女の菩提を弔ひける靈地なり。

さて、前々頁の山門に懸っている扁額「御手判寺」の由来は、秩父靈場草創の伝説として、播州姫路の書写山・圓教寺（西国三十三観音靈場のひとつ）を開いた性空上人が秩父札所を廻った時、夢の中で閻魔大王に遭い、石の通行手形（御手判）を貰ったという伝承に拠るものさうな。

この通行手形は閻魔庁でのお裁きの折に見せれば、無事あの世に行けるといふ有り難い手形である。前世の悪因悪業を引きずり、また、今生でも悪行の限りを尽くした上に、数限りない大法螺を吹き捲ってきた小生は、大枚ウン万円の喜捨をお供えてこの石板の版刷りを頂戴し書齋の壁に恭しく懸けているが、果たして魔羅吊りや舌抜きを免れる御利益有りや無しや？

（御手判石⇒）



【岩谷山 久昌寺】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】水上は いずくなるらん岩谷堂 朝日もくなく 夕日かがやく

（参詣日 2018/11/28）



第二十六番「萬松山 圓融寺」(秩父市)



(懸崖に懸る舞台造りの圓融寺奥之院・観音堂「岩井堂」)

第26番「圓融寺」の本堂は麓にあるが、奥之院の観音堂（岩井堂）は本堂から昭和電工というレア・メタルの工場の敷地を通して鬱蒼とした杉木立の中の参道を行くと、300段ほどの急な石段があった。

この苔むした由緒ありそうな石段には息が上がったが、この石段の上には京都清水の舞台を彷彿とさせる懸崖造りの朱色の観音堂があつて眼を瞠った。

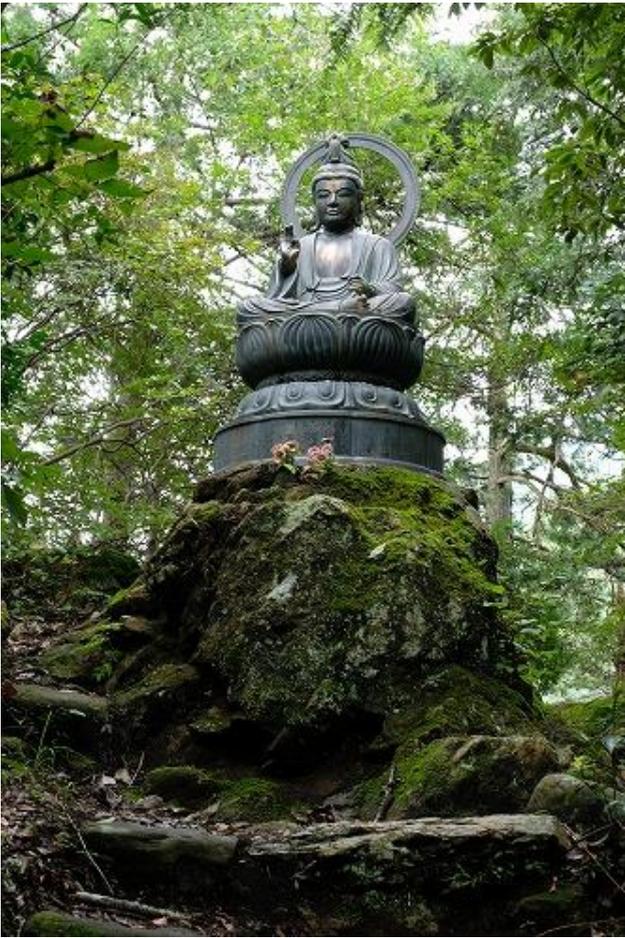
世情有名な鳥取県の「投げ入れ堂」よりも堂々としているように見えた。

三間四面、回廊と唐戸をつけた御堂は重厚でありながら、急な岩の斜面に軽々とその大屋根を支えて天に伸びているが如くであった。

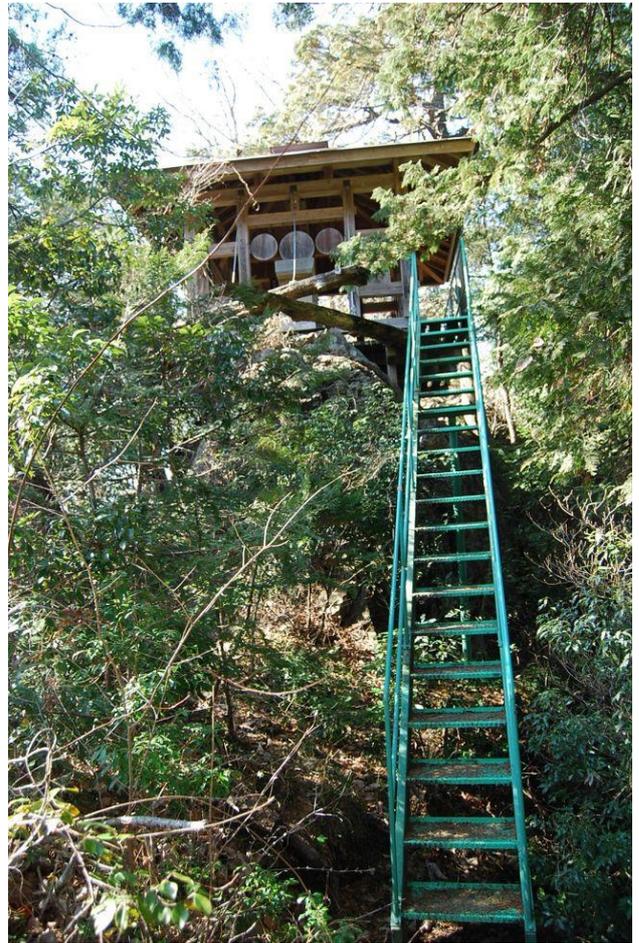
また、この岩山の尾根には高さ六尺の鑄造大仏坐像と修験堂があり、この辺りがかつての武甲山の修験道であったことを偲ばせた。この大仏の目方がいくらあるのかは分からないが、こんな重い仏像をよく懸崖の上まで担ぎ上げたものと感心する。



(キツかった300段の石段参道)



(「秩父二十六番 聖観音」の銘がある大仏坐像)



(今はハイキング道の長大な鉄梯子が掛かっている修験堂)

この岩井堂からは、稜線上の山道（琴平ハイキングコース）を次の第27番札所「大淵寺」へ下った。適度なアップダウンのある静かな稜線上の山道であった。

【萬松山 圓融寺】 臨済宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】 尋ね入り、むすぶ清水の岩井堂 心の垢を すすがぬはなし

(参詣日 2018/11/28)



第二十七番「竜河山 大淵寺」(秩父市)



この寺の前に詣でた岩井堂（26番圓融寺奥之院）から、尾根伝いのハイキングコースをアップダウンしながら約30分、下方の境内に端正な御堂の屋根が見えてきた。これがこの27番「竜河山大淵寺」の観音堂（月影堂）である。境内に延命水という湧水があって、これを一口飲むと33日間長生きするそうだから二口飲んでみたが、験があるかどうか。

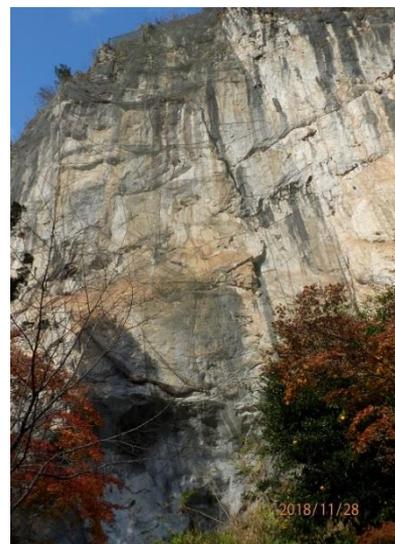
【竜河山 大淵寺】 曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】 夏山や しげきが下の露までも 心へだてぬ 月の影もり

(参詣日 2018/11/28)



第二十八番「石龍山 橋立堂」(秩父市)



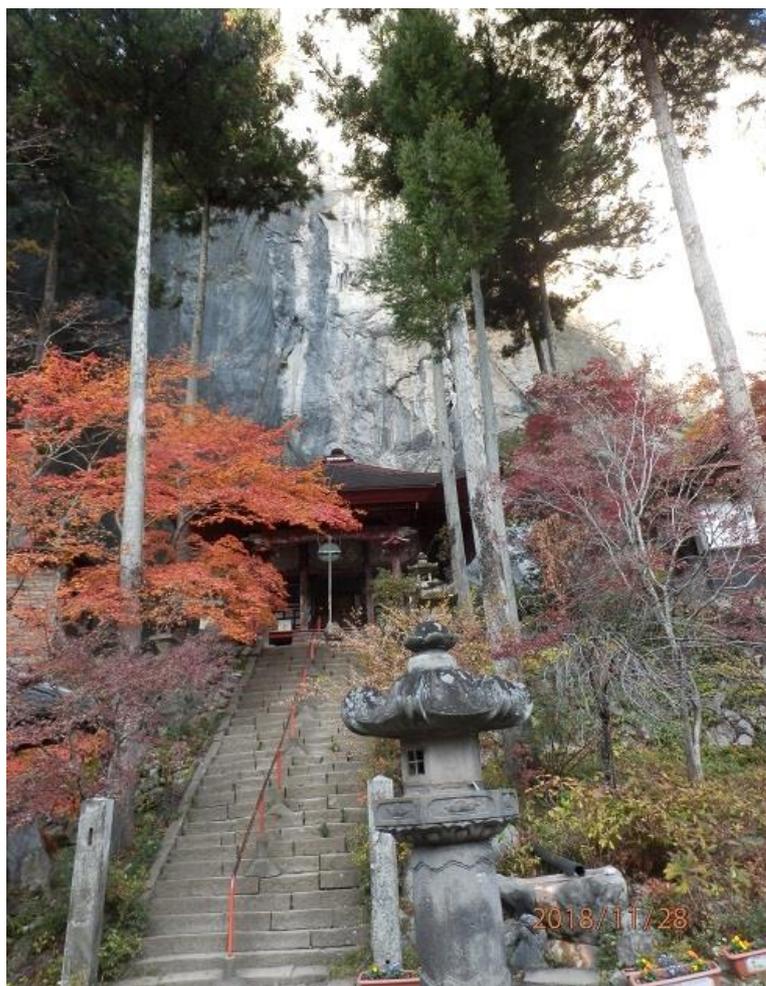
(高距 70m の垂壁)

27番「大淵寺」から緩い登り道を半時間ほど行くと、浄水場の先で谷道に降った所に大岩壁があって、その大岩壁に張り付くようにして観音堂が建っていた。境内には鍾乳洞もあるので、この岩壁はかつての武甲修験の霊地でもあったのであろうか。

何年か前に、那智の滝を沢登りして聖域を穢した罪で逮捕されたクライマーがいたが、ここの岩壁もちょっとしたもので垂直に切れ落ちている高距70mの垂壁はクライミングの興趣に誘われた。(もともと、腰椎骨折のロートルの身ではたとえお許しがたとしても最早如何ともしがたいが・・・)

(岩壁にへばり付いて建てられている観音堂)

さて、余談はさておき、この寺の縁起は次頁のようなものだろうな。



市指定史跡 札所二十八番

石龍山 橋立堂



大岩壁と橋立堂

この札所は、高さ八十米もある石
灰岩の直立した岩壁下に建てられ、
堂は三間四面、宝形屋根で江戸中期
になるものといわれます。

本尊は馬頭観世音坐像で、像高二
八極の小さいのですが、三面六臂

の姿はひさしまり、鎌倉時代の優秀な作として、昭和三三年七月市の指定
文化財になっています。

縁日には近在から来る馬を曳いた参詣者で雑踏を極めたといひます。
その昔この地に惨酷非道、仏神の信心なき領主、領地をみまわり、銅を
もって鑄し地蔵菩薩像を里人崇敬し得るをみて、仏神の益何事あろうと、
打ちこわしその財を己れに費やせば、領主たちまち病に死し、その子孫す
べて跡方もなく消えたという。

まもなく大蛇出て里の憂いとなり、里人は一心に当山に祈ればいづく
なく白馬現われ心よげに走り大蛇この馬を一口に呑まんとするに、白馬
の額より光明をさせば、たちまち大蛇人語を発し「吾先に死し領主なりい
ままさに仏知にひかれた得脱を得たり、吾この姿を末代にとどめて衆生
の信心を上げまさん」と池中より出れば金鱗変じて石と成り、白馬は本尊
の御帳に走り入りたという縁起があります。

昭和40年1月25日

秩父市教育委員会指定

2018/11/28

この寺は、珍しく本尊が馬頭観音である。
日本全国百観音霊場札所の中で馬頭観音を
本尊として祀っている寺は、秩父 34 観音
霊場のこの寺と、西国 33 観音霊場の松尾
寺（兵庫県舞鶴市）のみであり、坂東 33
観音霊場には一寺も無い。

因みに、秩父 34 観音霊場では聖観音菩
薩を本尊とする寺院が 21 寺と半数以上を
占めており、残るは十一面観音が 6 寺、
千手観音が 3 寺、如意輪観音 2 寺、准胝
観音一寺となっている。

境内には、伝左甚五郎作の 2 匹の馬が
奉納されている馬堂や馬の銅像もある。
かつてのこの寺の縁日には、飼馬を引い
て参詣に来る人々で参道が賑わったとい
う。馬が自動車に変わった今日でも、
交通安全祈願で訪れる人が多いそうだ。

（三面六臂の馬頭観世音菩薩、頭上の馬頭に注意）
馬頭観世音菩薩＝優しい顔の観世音菩薩の中で
唯一憤怒の相を現している観音菩薩。憤怒の形相
で諸悪を喰い尽して災厄を除き、地獄に落ちた者
や牛馬を苦悩から救うと信じられている。





(伝左甚五郎作の2匹の馬が奉納されている馬堂)



(大蛇を退治して本尊の御帳の中に走り
入ったという白馬)

境内の中に蕎麦屋があったので、缶ビールを飲んで遅い昼食を摂ってから本日最後の札所第25番久昌寺に向かった。

【石龍山 橋立堂】 曹洞宗 本尊：馬頭観世音菩薩 おん あみりと どはんば うんはった そわか
【御詠歌】 霧の海 たち重なるは雲の波 たぐひあらじと わたる橋立

(参詣日 2018/11/28)



第二十九番「笹戸山 長泉院」(秩父市)



第29番「長泉院」は秩父鉄道「浦山口駅」から30分ほど浦山川沿いの集落を登った浦山ダムという発電？ダムのすぐ下にあった。
その道には芭蕉の句碑も建っていて里山の雰囲気が溢れた良い道であった。



(↑ 芭蕉句碑 「草臥れて宿かる頃や藤の花」)



(← 見上げるように高い浦山ダム)

そのダム^の真下のドンヅマリに山峡の橋が架かっていて、そこを登った尾根の末端の台地に集落があり、そこにこの長泉院が建っていた。境内も広く伽藍の結構も立派であったので、由緒ある大寺とお見受けした。境内の庭園も庭師の鉄が入ってよく手入れされているようだった。

参道の入り口に右のような石碑が建っていた。逆光なのでちょっと読みにくい^が、右は「笹戸山石札道場」、左の石碑には「笹戸山 長泉禅寺」と彫られていた。左は相当な年季を経たものだった。

「石札道場」の石札とは、むかしむかし、秩父観音札所巡礼を創った十三権者*が秩父を巡錫した折に、十三権者の一人である熊野権現が熊野産の黒石に「石札定置巡礼」と刻んだ石札を奉納したことがその縁起と伝えられており、その石札はこの寺の寺宝として本堂の厨子に祀られている。

熊野権現が奉納した石札がある観音巡礼札所は全国的にも珍しいようで、秩父 34 札所のこの寺と西国 33 札所の第 24 番摂津「中山寺」、坂東 33 札所の第 25 番筑波「大御堂」の 3 札所だけだそうである。また、「石札道場」の「道場」は、かつての秩父巡礼が秩父修験道に支配されていたことを窺わせる。

この石札の後には「よみがえりの一本桜」と呼ばれる枝垂桜の古木大樹があつて、春には見事な枝垂れ桜花を咲かせるそうだ。

ところで、本堂を拝むと、天井には千社札を貼つたような納札天井が見えるが、これは紙を貼つた千社札ではなく、千社札に見せかけて実は天井の板に納札の文字を彫り込みこれを黒漆で塗つたもので、なかなか洒落た意匠であつた。

【十三権者*】

閻魔大王・俱生神・花山法王・性空上人
・春日開山医王上人・白河法王・長谷徳道上人・良忠僧都・通観法印・善光寺如来・妙見大菩薩・蔵王権現・熊野権現が秩父の魔を破つて巡礼したのが秩父札所巡礼の始まりという。この 13 人を十三権者という。閻魔大王、花山法皇、白河法皇が入っているのが些か胡散臭いが・・・。



(長泉院の石札)



(納札天井)

さて、恒例によりこの寺の開山縁起を。

人皇 44 代元正天皇（奈良時代の女帝）の御代、この山の麓の淵より龍に乗った女（女に化けた龍神 or 龍に化けた女）が龍灯を燈して毎夜毎晩この山の窟に通っていた。里人、これを怪しみ、また尊んでいたが、年を経て上記の十三権者一行が当地を巡錫した際に里人に案内させて筐を掻き分けながら戸を開けてこの窟に入ってみたところ、窟内には燦然と輝く観音菩薩がましましていた。一行はこの奇瑞を喜び堂宇を建ててこの観音様を祀ったのがこの寺の始まりという。山号「筐戸山」はこの故事に拠る。



【笹戸山 長泉院】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】分けのぼり 結ぶ笹の戸おし開き 仏を拝む 身こそたのもし

(参詣日：2018/12/27)



第三十番「法雲寺」(秩父市)



第30番「法雲寺」は秩父盆地の盆の中の一番南の端に位置しており、鉄道で言えば秩父鉄道線の終点「三峰口駅」から一つ秩父寄りの白久駅という荒川源流部の鄙の駅から里山道を半時間ほど登った狭い谷間の山中にあった。

緑一色に囲まれた境内は狭いながらも庭木が綺麗に手入れされていて、春には花の寺としても賑わうらしい。

ここの本尊の如意輪観音は、唐の玄宗皇帝が楊貴妃の菩提を弔うために自ら刻んだ観音像を、この寺の開祖（建長寺の道穩禅師）が唐より奉持したと伝えられている。

この本尊は楊貴妃の姿を刻んだものであるから、その艶なご尊顔を拝したいものであるが、秘仏であるから毎年4月18日の観音縁日以外には公開されていないのが残念であった。玄宗皇帝には妖艶な傾城のお顔を見せながら、マ、小生如き衆生には後ろを向いて背面の恐ろしい般若の面をお見せになるのかも知れん。或いはまた「玉藻の前」に化けた七本の尻尾を持つ古狐かも知れんナ。



また、この法雲寺には、秩父札所巡礼最古の納札が保存されている。

それによれば、天文5年（1536年、室町時代）の納札には「・・西国・坂東・秩父百ヶ所巡礼只一人」と書かれているので、その頃には既に西国33札所、坂東33札所、及び秩父には1札所余分に加えられて全国100観音札所という現在の「日本百番観音札所」巡礼スタイルが出来上がっていたのであろう。史料としても貴重なものなそう（下の巡礼納札参照）。

秩父札所三十番法雲寺
市指定史跡

臨濟宗建長寺派の寺院で、開創は一三世紀中頃の鎌倉時代である。

本尊は如意輪観音で唐の玄宗皇帝の作と言われる。皇帝が戦場にあつて楊貴妃の冥福を祈り、観音の御心にすがる真情がうかがえて、美しく尊厳に満ちたものである。

堂宇は江戸初期には観音堂、本堂、二王門等を備えていたが嘉永年間（一八四九）火災に遭い、観音堂のみを残し悉く焼失した。

昔日の面影を残す観音堂と四季折々の花で彩られる浄土庭園との調和は見事であり、訪れる人々の心を和らげてくれる。

法雲寺の文化財

●巡礼納札

西国・坂東・秩父の日本百箇所の観音霊場となった史実の最古の記録を物語るものである。

天文五年（一五三六）奥州葛西氏の納札には
奥州葛西住 赤荻伊豆守平清定
西国・坂東秩父百ヶ所巡礼只一人
為二親菩提 天文五天三月吉日

この法雲寺がある辺りは、山里というよりも、深い山中の趣があった。既に陽が落ちて夕闇が迫っていた。

今回は、翌日に三峰口から関東山地を越えて小鹿野の第31番「観音院」まで足を延ばす予定であったから、三峰口の旅籠にでも泊まりたかったのであるが、残念ながら何の因果かどこも満員で泊まらず秩父鉄道で秩父市街に戻って泊まった。



（法雲寺付近、寺は奥の突き当りにある。奥中央の山は雲取山 2017m）

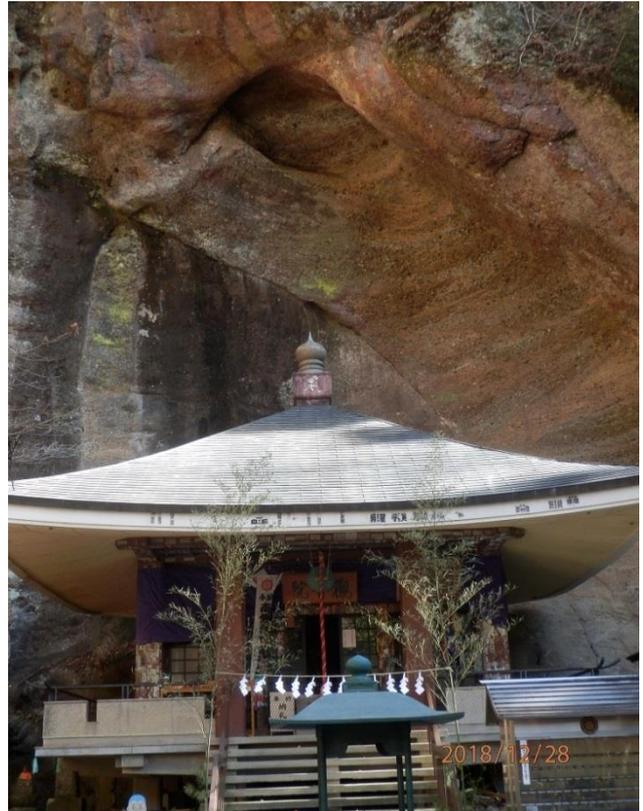
【瑞龍山 法雲寺】臨濟宗 本尊：如意輪観世音菩薩 オン・ハンドマ・シンダマニ・ジンバラ・ウン
【御詠歌】一心に 南無観音と唱ふれば 慈悲深か谷の 誓ひたのもし （参詣日：2018/12/27）

第三十一番「鷲窟山 観音院」(秩父郡小鹿野町)

一つ前の札所第30番・白久「法雲寺」からこの第31番・小鹿野「観音院」までは、秩父霊場全34札所の内で札所間隔が一番長い区間で、約20kmある。徒歩で6時間程掛る。

長いと言っても、四国遍路の道中に比べれば微々たるもので、四国遍路の場合は例えば第37番「岩本寺」(土佐・窪川)から次の札所第38番「金剛福寺」(土佐・足摺岬)までの距離は約90kmもあり、歩き通して4日間掛るのに比べれば、こちらの方は屁でもないが、秩父の霊場は狭い盆地の盆の中にゴチャゴチャと密集しているので、20kmでもやはり長く感ずるのであろう。

昨夜泊まった秩父駅前ホテルを早朝に発って、始発電車で三峰口駅迄行き、歩き始めた。三峰口駅から秩父往還のかつての宿場「贄川宿」迄は20分ほどで迷う所も無かったが、そこから小鹿野方面に抜ける江戸巡礼古道の道がサッパリ分からなかった。



(磨崖に建つ第31番観音院「観音堂」)

贄川宿

秩父甲州往還を白久側から渡船場を越え、八幡坂を登ると贄川の宿に着く

新編武蔵風土記稿に「此所八江戸ヨリ甲州へノ道筋ニテ左右二屋並ソロヒテ廿六軒アリ。寛文七年ヨリ毎月二七日ニ市立セシガ・・・」
一六六七年

贄川宿は大宮郷(秩父市)に次ぐ秩父甲州往還の宿場で、三峯社講中・諸国商人衆の定宿として江戸初期から賑わいを見せていた。また宿の立地が上信や甲州への分岐点であったことや、物資の集散にも好都合であったため、六斎市や雑市も開かれた。

贄川宿の家並みは往還に沿って短冊状で、旅籠、酒屋、質屋、紺屋、豆腐屋などがあり、他にも医師、髪結い、荷継場などがあった。

この贄川宿には秩父の地質調査に来日したナウマン博士や宮沢賢治、それに明治の文豪幸田露伴も立ち寄り、いずれも東方の眺望を絶賛している。

江戸巡礼古道は、贅川宿から阿弥陀寺を
經由して大指集落から秩父往還を小鹿野・
両神方面に抜けるものであるが、この阿弥陀寺への入り口が分からず、小鹿野方面と
書いてある標識を頼りに最近出来たような
バイパス状の車道をズンズンと登ってみた
が、そのうち集落も人家も全く無くなって
車道はウネウネとした山間道路に変わった。
どうも道を間違えているらしい。道路標識
も全く無いから何が何やらサッパリ分から
ず全くのロストポジション。人に聞こうに
も早朝のことでもあるし、人影は勿論車も
全く通らない。



(「贅川宿」入口)

枝道に入って見たりしながら行きつ戻りつする内に1時間半
ほどが経過し、獣道のような小径に迷い込んでしまうと、右の
ような看板に出くわした(「ワナに注意」?!)。ヤヤ?、これは
猪か熊か鹿を駆除する罠ではないか? こんな山中で罠に掛つ
たり猟友会の鉄砲で撃たれたりしたのでは浮かばれないから、
歩き始めた贅川宿まで一旦戻ってから出直そうとトボトボと引
き返している、何とこれは天佑、小鹿野町営バスと書いて
あるマイクロバスが登って来たではないか。手を挙げて止ま
って貰って運転手に聞くと、今日の目的地である小鹿野の札所
「観音院」への入り口に当る小鹿野町役場両神庁舎まで運行す
るといふ。ここは停留所ではないから乗せてはいけないのだが、
困っておられるようだからどうぞと乗せてくれた。



乗客は小生一人の貸切状態、運転手君がガイドに早変わりし
て小生専用の秩父往還観光タクシーとなった。

30分間の有り難い旅であった。

両神に下車してからも、札所巡礼の道標は全く見つからず、
観音院への道を役場の方に聞くと、未だ開庁前の時間であるに
もかかわらず、途中まで同行して案内して下さった。

観音院登山口のある県道までは、地元の人
が犬の散歩にくらいしか通らないような川原
を渡り落ち葉が積もった山の獣道を抜けるよ
うな藪の中の獣道であったが、これはこれで
冬枯れの野の風情があった。



(小さな川に架かっている板橋⇒)

マ、このようにして道を間違えたりしながらも、何とか目的の第31番札所・小鹿野「観音院」に辿り着いた。観音院に登って行く道は、栗尾という登山口の集落を最後に、「岩殿沢」という荒川の小さな孫沢に沿って狭い谷間を登って行く。途中には右の写真のような水子供養の地蔵寺もあった。

(途中にあった「地蔵寺」。ピンク色に見えるのは水子供養の地蔵菩薩。小さな地蔵様が斜面にびっしりと並んでいた)



この沢沿いの道をウンウン言いながら登ると、道のドンゾマリに観音院の朱塗りの山門（仁王門）が現れた。この付近は、岩殿沢という名前が付いているだけあって、周りの山は岩崖だらけであった。実は観音院の観音堂もこの上の山中の崖淵に建てられている。この仁王門の仁王像は、上の観音堂の上の崖から切り出された岩の塊を棕櫚縄でここまで下して一岩彫で（岩を継がずに）刻んだものさそうな。何十トンあるのか知らないが、よくぞこんな大きな岩塊を切り出して、しかも縄でぶら下げて下すという離れ業をやったのけたものと思う。



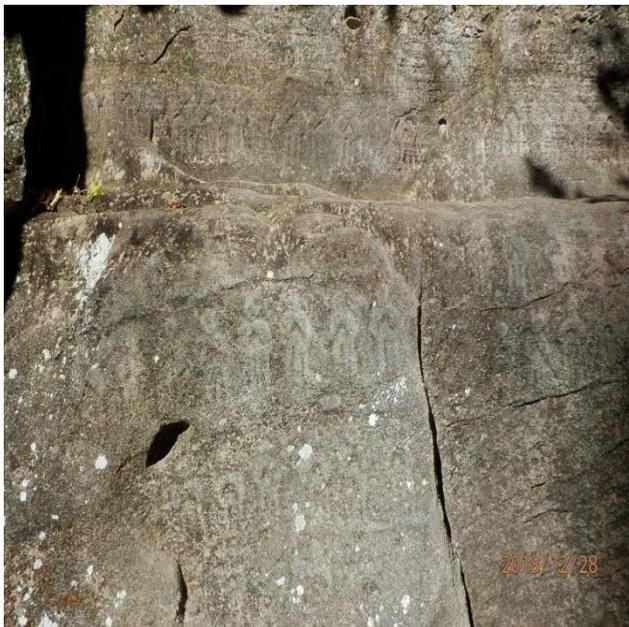
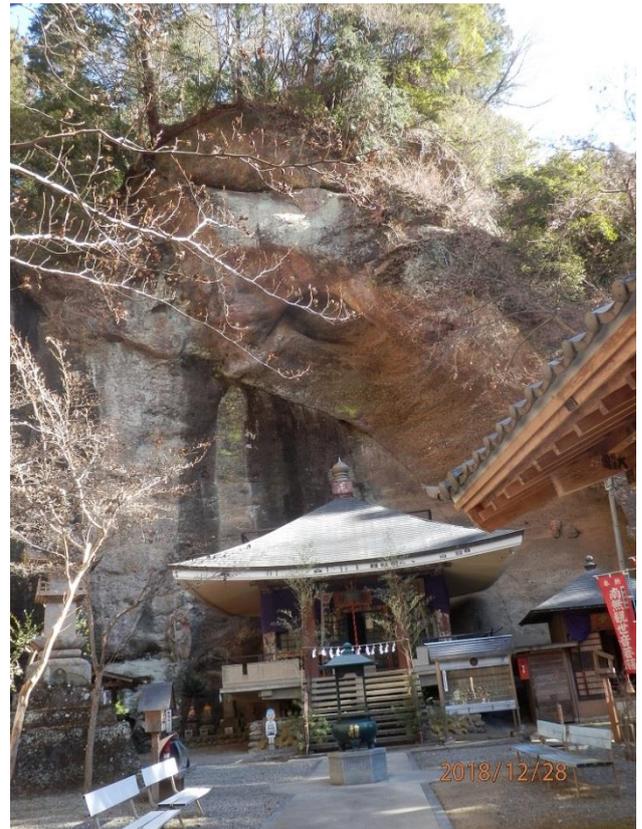
(観音院の仁王門。阿吽の石造り仁王像は一岩彫では日本一の大きさであるそう)

さて、仁王門から急な3百段の石段を登ると、猫の額ほどの平地に観音堂や他の小さな堂宇が建っていた。廻りは見上げるような岩の崖であった。観音堂の屋根には大きな岩庇が覆いかぶさっていた。

この寺の境内には弘法大師が一晩の内に爪で彫ったという磨崖仏があった。驚窟磨崖仏という。風雪に曝されて彫像が判別しづらくなっているがこの磨崖だけでも千体刻まれているそうだ。奥之院まで合わすと全山で1万8千体ほどの石佛が祀られているのだそう。



(観音堂→)



(←爪彫磨崖仏。少し見にくいですが上段、中段、下段の3段に並んで彫られている。この磨崖は上の観音堂の左側面の上下左右に7丈ほども高さがある垂直な壁なので、この壁には万に近い磨崖仏が掘られているのであろう。壁の大部分は苔むしてその全貌は見えないが・・・)

磨崖に造られた寺院は、この秩父でも第28番「橋立堂」などがあり、また、坂東33観音霊場には大谷石の崖窟に設えられた宇都宮の「大谷観音寺」が有名であるが、この秩父小鹿野の観音堂もそれに負けない風格と規模を備えていた。この寺は観音山という標高698mの急な岩の斜面に建っているのであるが、いわば観音山全山がその伽藍であり、奥之院も東奥之院、西奥之院（今は崩壊で通行禁止）の二つがあって、これを巡る修験の寺であったと思われる。観音堂横の滝（聖浄ノ滝）は修験の水行場であろうし、そこに祀られている不動明王は修験道と関係が深い仏である。

また、絶壁のオーバーハング状の岩窟にも沢山の仏像が祀られているが、このような登ることもできないような窟にどのようにして石仏を持ち上げたのであろうか。

奥之院派の小生としては、奥之院を見逃すわけにはいかない。西奥之院は崩壊で通行禁止になっているので残念であったが、東奥之院には行ってみた。小さな支尾根の端を廻る修験の道であったが、秩父・多摩・甲斐・信濃・上野国境の深山の眺めもなかなかによろしかった。

小鹿野町指定史跡

札所三十一番鷲窟山観音院

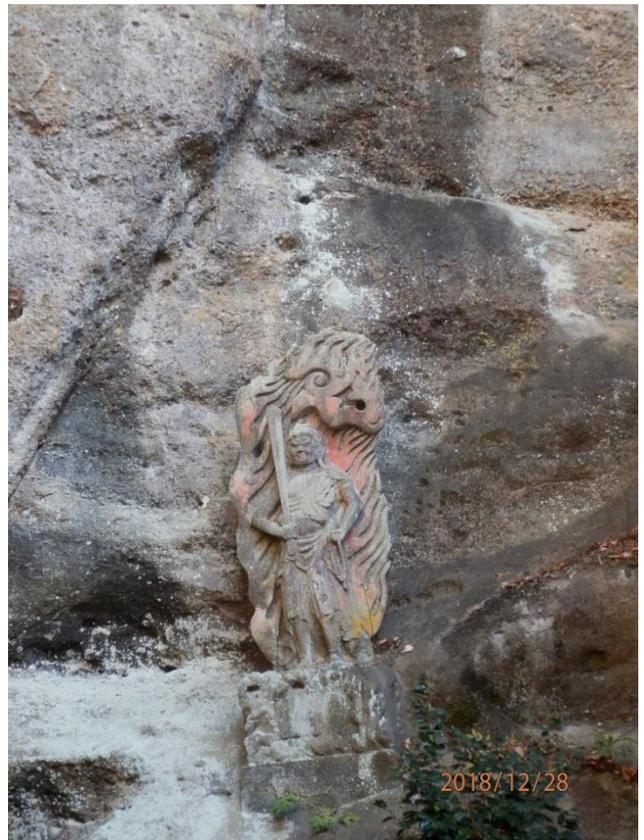
中most西端の当観音院は、秩父霊場中随一の称ある景
いる。

四方浄土として照見したのであろう。境内の岩壁に
仏の名号を刻し、その下位に弘法大師の一夜彫りと
宗指定史跡「鷲窟磨崖仏」がある。東奥の院には数
群像のほか、山頂に宝篋印塔、芭蕉句碑等がある。

況にも多数の石仏が安置され、幻想の世界に誘われる。
観音像は霊験記によれば、畠山重忠当山に狩獵の折
るを見、家臣本田親常に矢を射させたが、再三矢が
た。不思議に思い、その巢を見れば中に聖観音おわ
て郷民の言い伝えるその昔、行基の刻みたる観音像
親常に命じその本堂を建立せしめたという。その後
幕末の頃、本山中興二度開山十六世観法印、さ
本堂並びに境内の大宝篋印塔等を建立する。観法法
治二十六年二月本堂焼失する。その後長らく仮堂の
たが昭和四十七年四月現在の本堂が再建された。本
土より落下する二十余メートルの清浄の滝は清々し
造仁王尊は、信州の石工藤森吉弥一寿の名作にし
メートル、その規模は本邦第一と称される。



(聖浄ノ滝。冬場は水が枯れているが・・・)



(風格のある不動明王像)



(大宝篋印塔。風格があった)



(慈母親音。優しい顔、安らかな児。古びてはいたが、
得も言われぬ品格があった。相当な仏師の手によるもの
と思われる)



(急な岩崖にある岩窟にも石仏の奉祀が・・・どうやって運び上げたのか?)



(東奥之院の小さな堂宇)

この観音院の山号は「鷲窟山」と言うが、その名のとおり深山の天空を舞う鷲が巢を作るような断崖絶壁に造営されたこの霊場は、その雰囲気と言い風格と言い、今は無住の鄙寺ではあるが、秩父観音霊場随一の札所ではなかろうか。

堂宇や境内には手が入っていて綺麗に片づけられていた。人里離れた山奥の修験寺だから檀家などというものも無いであろうから檀家からの喜捨は入らないと思われるが、これらの護持費用はどうなっているのだろうか。山奥の鄙の霊場であるから観音巡礼参詣者もさほど多いとも思われなから、納経料お一人様300円也だけの浄財ではとても間に合わないと思われるが・・・。

他に誰も参詣者が居なかつたので、落ち葉を掃除されていた寺守の方と小1時間ばかり雑談したが、寺の縁起など種々の案内を拝聴することができて有り難かった。

帰途は、途中にあった観音茶屋なる茶店で般若湯ビール2本を頂いてこの店の名物だというナントカ定食を喰い、栗尾からバスで秩父駅に出てレッドアローで帰宅した。



【鷲窟山 観音院】曹洞宗 本尊：聖観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】深山路を かきわけ尋ね行きみれば 鷲のいわやに ひびく滝つ瀬

(参詣日：2018/12/28)



第 32 番「般若山 法性寺」(秩父郡小鹿野町)



(法性寺山門、秩父 34 札所唯一の鐘樓門、山号「般若山」の扁額が風格がある、宝永 7 年建立)

秩父 34 観音巡礼もいよいよ終盤に入り、同じ山の会の山友達の秩父巡礼 3 巡結願かつ四国遍路も 3 巡結願というベテラン巡礼の眞知姐サンと、巡礼はやらないが秩父の山歩きはこの人の右に出る人はいないというくらいひろニイの宏兄サンを先達として最後の 3 札所を巡った。

今までの四国歩き遍路や坂東 33 観音・秩父 34 観音巡礼は、弘法大師や観世音菩薩との同行二人で廻ったが、生身との同行三人もこれはこれでなかなか乙なものだった。折から 2019 年正月松の内の直後だったので、新春の良い記念にもなった次第。

さて。

この先達 2 人と池袋駅で集合、レッドアロー号で秩父に入りバスで小鹿野まで行って、丁度昼飯時だったので小鹿野の食堂に入って小鹿野名物とかいう「わらじカツ丼」で腹ごしらえをして第 32 番「法性寺」に向かって歩き始めた。

小鹿野から第 32 番札所「法性寺」へ詣る巡礼古道である大日峠越えは、小さな沢沿いの落ち葉の絨毯を踏む静かな山道であった。太古には海蝕が此処秩父まで入っていて、秩父盆地は“秩父湾”の海底であった地層が隆起褶曲してできたのだそうだが、その何段にも褶曲した地層が地表に現れていて見応えがあった。近くには化石博物館もあるそうだから、鯨やアンモナイトなどの化石も出たのではなかろうか？

そういえば、秩父は数千万年前からの地殻活動が凝縮された地形や褶曲や露頭が至る所に露出していてジオパーク（「ジオパーク秩父」）に指定されているそうだ。典型的なものは「赤平川のようなげ」と

呼ばれる見事な地層の断面を見せる大きな崖や長瀬の畳岩や奇岩などで、前回巡った札所 31 番「小鹿野・観音院」の巨大な露岩や第 30 番「橋立堂」の鍾乳洞なども典型的な秩父のジオサイトだそうだ。

このような地形や地質が顕著に現れていたために、秩父は地質学研究フィールドの嚆矢となり“日本の地質学発祥の地”と呼ばれているような。（「赤平川のようにばけ」⇒）



閑話休題。

大日峠を反対側に下った最初の集落に第 32 番「法性寺」はあった。こんな山中に何故こんな大伽藍がと思わせるような大寺の佇まいであった。山門は冒頭の写真の如く二階部分に回廊を巡らせ、天井に鐘を釣った鐘楼門で風格と見応えがあった。

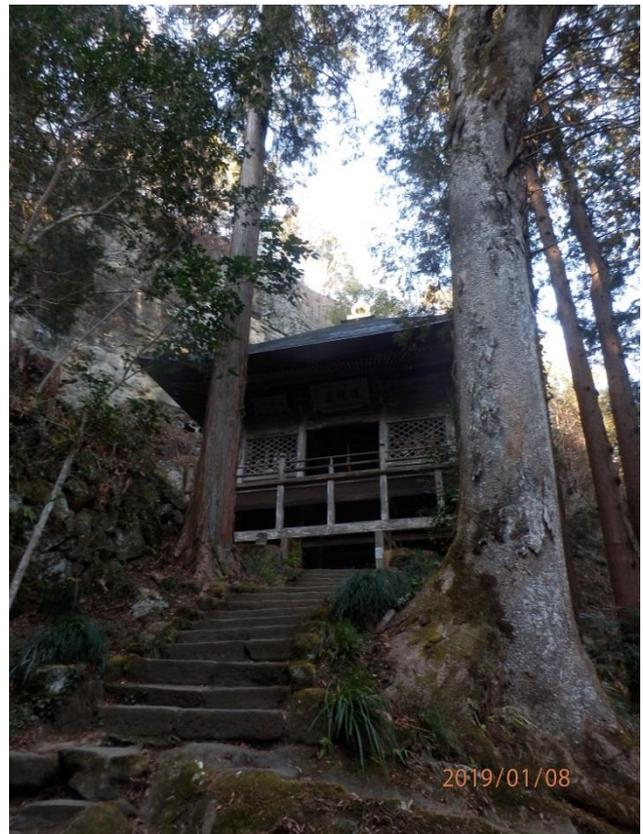
岩船山という全山一枚岩の巨岩の急斜面に造られた境内であるから、観音堂もオーバーハンクの下に造られた懸崖造りで、回廊を巡らせ均整が取れた姿には幽玄の趣と古風な品格があった。山門といい観音堂といい古刹の貫録充分であった。

さて、この寺の縁起は下記のようなものである。昔、当地豊島郡の住人、豊島権守が娘を同郡に嫁がせた。ある時娘が里帰りをしようと舟に乗ったところ、犀ヶ淵で悪魚にみそめられ、水底に引き込まれそうになった。その時、一人の美女がその娘を助けて、舟に戻してくれた。従者たちは夢のように喜び、「どなたですか」と尋ねると、

「私は岩船山の者です。父をはじめ、主従がよく観音様を信じているので危難のところを助けました」と答えて消え去った。この不思議な光景を権守に伝えたところ、歓喜の涙を流して利益を尊び、その恩謝として諸所を巡礼した。そして当山を参拝し、帳をあげて拝むと、なんと笠を冠った観音様がおられた。涙を流し、三日三晩般若心経を写して供養をした。「或漂流巨海 龍魚諸鬼難 念彼観音力 波浪不能没」（妙法蓮華經 観世音菩薩普門品偈）の一節。

その「笠を冠った観音様」は、本堂の御前立観音として祀られている「お船観音菩薩」で、笠を被って櫓を漕いでいる珍しいお姿である（次頁写真）。また、観音堂の御本尊は伝行基菩薩作の聖観世音菩薩である。

また、山号「般若山」の由来は、弘法大師が一晩で大般若経六百巻を書上げたという伝承による。「般若」は、下司の小生には例えば葵上・六条御息所の「嫉妬や恨みの籠る女の顔」の恐しい般若面か、せいぜいが門前町の赤提灯での般若湯くらいし



（観音堂）



（本堂に掛けられている般若面）

か思い浮かばないが、実は「般若」とは万物の真実相を直観的に把握する智慧（知恵とは異なる）のことで、これにより悟りを開く智慧のことを言うのだそう。般若心経や大般若経などは後者の口である。



↑ 寺伝を語る「お船観音菩薩像」額（観音堂）

← 「お船観音菩薩」（本堂御前立）

衆生の苦しみを救う為に水夫に化身して垂迹された御姿は
どことなく素朴で微笑ましい （法性寺 HP から引用）

また、懸崖の観音堂の岩窟には子授け地蔵を祀っている小祠が建っていた。この岩壁に出来ている蜂の巣状の穴ボコはタフォニと呼ばれる土質現象で、土中に含まれていた塩類を含む水分が風食されて蒸発し、その結果、塩類の結晶が成長して岩石の表面を崩して出来た珍しい穴だそうで、これもこの寺のジオサイトのひとつとなっている。



（タフォニ現象による蜂の巣状穴ボコ、小祠は子授け地蔵尊）

さて、閑話休題。

この寺の伽藍は全山露岩の岩船山という岩山の急斜面に貼り着いている。山門から本堂、観音堂へ登れば、その先は奥之院への修験道となる。本堂の前から山の上を見上げると、巨大な露岩の上に次ページの塔のようなモノが見えた。

この塔のようなモノは実は奥之院に祀られている鑄造の聖観世音菩薩で、この土台の露岩は長さ 200m、高さ 80m の船形をした巨大な露岩である。砂岩が浸食されて出来た突き出した断崖だそうで、これも法性寺のジオサイトだそう。

船の舳にはこの聖観世音が祀られ、艫の方には大日如来が祀られている。この船形の露岩全体が奥之院で、「お船岩」という。

奥之院へは本堂から往復 1 時間半程掛かる険しい修験道で、奥之院への最後の登りは鎖だそう。従がって、足弱の参拝者の為には本堂前には奥之院遥拝所がしつらえられていて、足の位置には仏足石（釈迦の足跡を刻んだ石）もしつらえてあるので、お釈迦様と奥之院聖観世音菩薩の両方の功德が得られるという寸法である。

アナタ嬉しの仕掛であるが、奥之院派のワタシ奴としては、このような修験の奥之院には是非巡礼せずばなるまい。

観音堂の横から奥之院への道に入った。まずは、大きな岩の洞門を潜る。異界への入り口に相応しい大きな岩の割れ目であった。



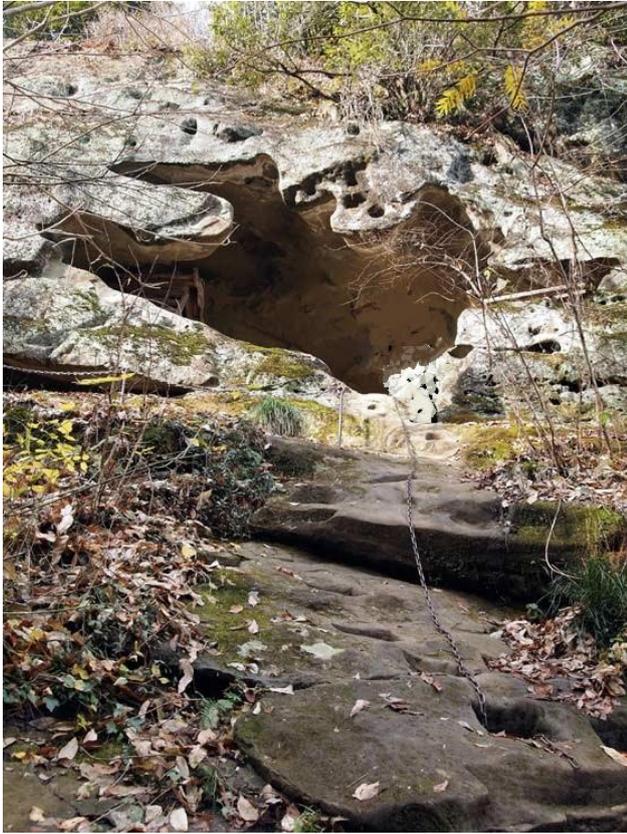
(奥之院お船岩の舳に建つ聖観世音菩薩、本堂前の遥拝所から)



(左端の岩の割れ目が奥之院への入り口、何やら異界に相応しい雰囲気ではないか?)

急斜面をハツる落ち葉が積もったトラバース径を登って行くと、足場を掘り込んだ岩に鎖が付けられた洞窟があった。龍虎岩という。何故このような穴が開いたのか不思議なことであるが、流石はジオサイトに認定されただけの理由があるのであろう。

登ってみると洞窟の中には胎内観音・金毘羅が祀られていた。また洞窟の奥の穴には仏像の形をした自然石があり、座禅仏として拝まれているそう。



(龍虎岩の洞窟、岩に足場が切ってあった)



(洞窟内に祀られた胎内観音 金毘羅)



(洞窟内の座禅仏の自然石)

龍虎岩から滑り易い落ち葉の小径を登って行くと、月光坂という急坂にぶつかった。ここが奥之院までの半分の行程という標識があった。未だ半分しか登っていないことが分かってガッカリした途端、腰椎骨折の病み上がりの小生は急に腰に激痛を覚えて、残念ながら今回はここで奥之院巡りを断念し、2ヶ月後の3月に再びこの奥之院だけを単独日帰りで詣でた。

以下は2回目の折の様子である。

月光坂から上の道は、石がゴロゴロしたトレンチで、昨夜降った雨でぬかるんでいて歩きづらいことこの上ない。

やがて稜線直下の岩窟に石仏が祀られていた。

— 8 1 —



(稜線直下の岩窟石仏群、「奥之院まであと一步」)



(左：筆者、右：宏先達)

苔むした石仏はどれも年季の重みを感じられるものばかりであった。観世音菩薩像に加えて不動明王らしき石仏も祀られていたので、かつては山岳修験の場であったのであろう。

この岩窟の下は一枚岩の急な崖で、そこに石段が刻まれ鎖が設置してあった。石段は摩耗して、古来から沢山の修験者が登ったことを窺わせた。



(一枚岩に刻まれた石段)



(観世音菩薩か?)

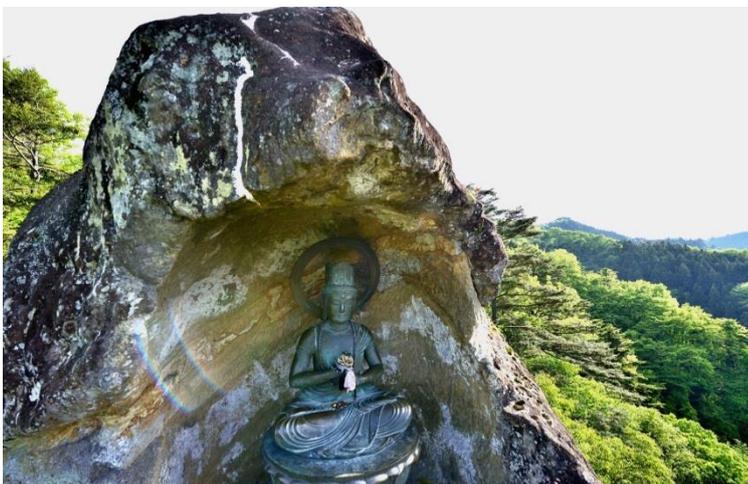


(不動明王か?)

ここから先が奥之院巡りの佳境。身の毛がよだつ馬の背の地獄坂で、なるほど一歩足を滑らせると千尋の谷に真っ逆様という塩梅であった。垂直に近い岩壁に足場が刻まれていて、鎖がぶら下がっていた。手摺もあるにはあったが、老朽化してガタガタになっていて、掴まると身体の重みで一気に千尋の谷に転落という塩梅だった。アア、恐ろしや、恐ろしや。怖くて怖くて、御叱呼をチビッてしまった。



ここを登って行くと船の艫の部分の岩窟の中に大日如来が祀られていた。大日如来は諸仏・諸菩薩の根元をなす理智体で、宇宙の実相を仏格化した根本仏である。ナルホド、そのようなお顔であった。

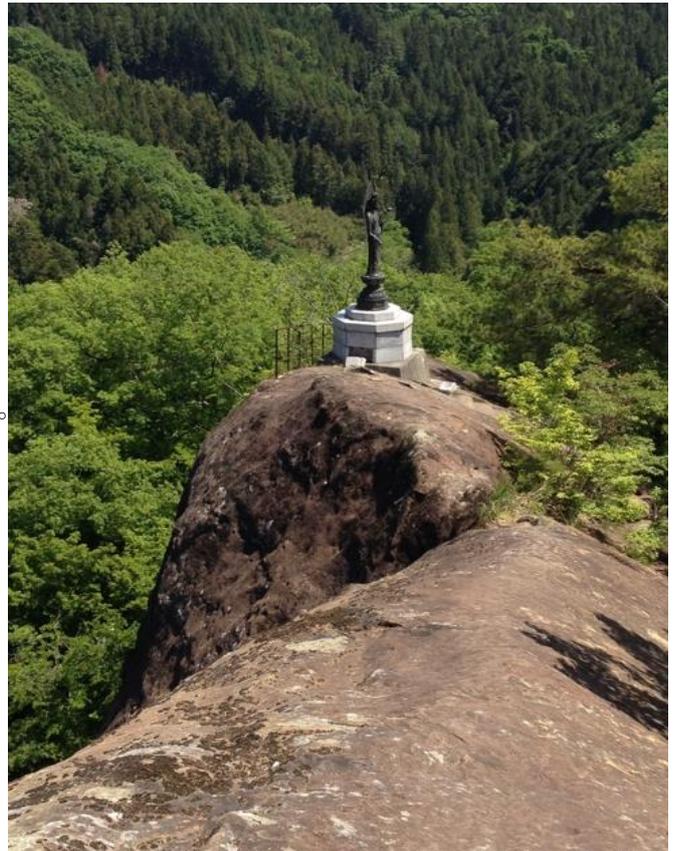


艫からは舳の部分に繋がる馬の背の岩稜があった。その舳に祀られているのが本堂の前の奥之院遥拝から見た聖観世音菩薩であった。

奥之院から下山すると、山門の横では六地藏が迎えてくれた。秩父の観音霊場には六地藏を祀ったお寺が多いが、その殆どは六体別々な地藏尊を並べて祀っている場合が多いが、この法性寺の物は六体を一石に刻んだ珍しいものだった。



(法性寺の六地藏)



ここを渡るのはチョット恐ろしい

最後に、観音信仰巡拝者で繁盛していた江戸時代の伽藍の様子と、観音霊験記を掲げておく。下の境内の絵の左上から中空に突き出している大岩が奥之院のお船岩である、大勢の巡礼で混雑している境内の様子が描かれている。



(江戸時代の繁盛する伽藍の絵図)

(法性寺「観音霊験記」⇒)

左が水夫に化身して垂迹された法性寺の本尊・
お船観音菩薩、右は悪魚に見初められた権守の娘

【般若山 法性寺】曹洞宗

本尊：聖観世音菩薩

オン アロリキヤ ソワカ

【御詠歌】願はくは 般若の船にのりを得ん
いかなる罪も 浮かぶとぞ聞く

(参詣日 2019/01/08)



この日は、32番「法性寺」から里山の
田園地帯を1時間程歩いた小鹿野温泉旅館
「梁山泊」に泊まった。鄙びた里山の麓の
なかなか良い宿であった。



(左から、真知姐サン、宏兄サン、小生)



(旅館「梁山泊」にて、両先達)

第三十三番「延命山 菊水寺」(秩父市)



小鹿野の温泉旅館「梁山泊」に泊まった翌朝は、里山の田園地帯を通る江戸巡礼古道を歩いて第33番「菊水寺」と第34番結願寺の「水潜寺」に詣つた。途中からは山頂に雪を被った両神山も見えて懐かしかった。

(両神山⇒)

菊水寺は田圃の中にあった。この寺の見所は、本堂の土間に掲げられた「小がえし」の絵図とその反対側の壁に掲げられている「孝行和讃」の絵馬である。



「小がえしの絵図」は江戸時代に流行った間引き（嬰兒殺し）を戒めた絵図であり、般若面の顔をした間引き婆が子供の首を絞めている様はちょっと凄みがあった。

「孝行和讃」絵馬は、往時の寺子屋で教えていた修身親孝行の教科書であろう。いずれもボロボロに破れていたのので、早い時期に永久保存処置を施した方がよろしいのではなかろうか。

【延命山 菊水寺】曹洞宗 本尊：観世音菩薩 オン アロリキャ ソワカ

【御詠歌】春や夏 冬もさかりの菊水寺 秋のながめに 送る年月

(参詣日 2019/01/09)



第三十四番「日沢山 水潜寺」(秩父郡皆野町)



この寺は秩父 34 霊場の第 34 番札所・結願寺であり、秩父盆地の北東端の盆縁にある。江戸からの参拝客が秩父観音霊場巡礼の主役になった江戸時代以降、秩父盆地東端の盆縁に位置する「四萬部寺」を一番札所としてこの盆地に入った巡礼は、盆内を巾着型に小鹿野の 33 番札所「菊水寺」まで時計回りに巡礼して最後にこの 34 番札所・水潜寺で胎内くぐりの水を潜って身を清めてから俗世に還り、ここから江戸に戻って行った。寺号の「水潜寺」はそのものズバリでネーミングとしては風情に欠ける。

そういう訳で、この水潜寺は秩父観音巡礼の結願寺だけでなく、元来の秩父 33 観音札所に、廃寺になっていた「真福寺」(現在の第 2 番寺) 加えて 34 札所とし、西国 33 観音、坂東 33 観音巡礼を併せた日本百観音巡礼の結願寺でもあるというポジションを付加した。

何事においても後発メーカーにはそれ故の苦勞が多いものであるが、この場合は最後発(日本 3 観音霊場巡礼の中で秩父巡礼が最後発)を逆手に取って日本百観音巡礼なるモノを編み出し、そこの結願寺になるという営業戦略を生み出したことはなかなかの知恵である。

そのような訳で、この水潜寺は日本百観音の結願寺とするための仕掛けとして、水潜寺の本尊・千手観世音菩薩を中尊に、脇侍には西国を象徴する阿弥陀如来(西方浄土)、及び坂東を象徴する薬師如来(東方瑠璃光世界)を配している。中尊には如来、脇侍には菩薩を配することが一般的な慣習であるが、ここでは順序が逆になっている。その他にも種々の仕掛けが用意されているが、これは後で記す。

さて。

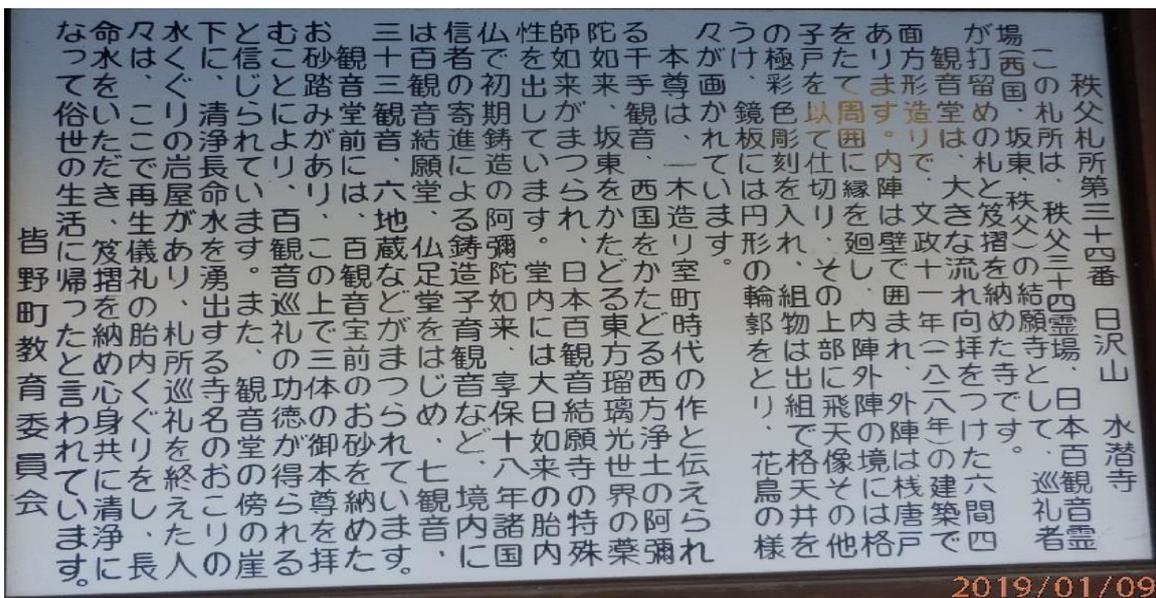
菊水寺からこの水潜寺までは、江戸巡礼古道である札立峠を越えて歩くのが峠越えの風情が味わえる巡礼路であるのだが、このルートは歩くと 3 時間ほど掛かり、昨夜泊まった小鹿野温泉の「梁山泊」を出てこの前の札所の第 33 番「菊水寺」への道を失って 2 時間程山中をウロウロと彷徨っていたために、

このまま歩いて行けば納経所の閉所時間 16 時に間に合わなくなるので、菊水寺の近くから小鹿野のタクシーを呼んで水潜寺までタクシーで飛天した。最後の結願寺で手抜きをしたことになるので、ここまで積んできた御利益が落ちたかも知れないが、マ、どうせ前世の悪因と今生の悪業に苛まれている身にはどだい瑞兆や御利益などというモノにはご縁が無いのであるから、気にすることもなかろう。

さて、この寺は日沢という狭い谷底にあるので山号を日沢山と言うが、山号に反して陽が射す時間は 1 日の内で午前のたった 1 時間だけだそう。その為午後の境内は冷凍庫の中。小生の参拝を待っていてくれた先達のお二人は、眞知姐サンは駆け足運動、宏兄サンは地団太を踏んで体を温めていた。



(水潜寺参道。左に並んでいる仏像の列は観世音菩薩の 33 変化仏。石碑には「日本百観音結願寺」、「秩父三十四番札所」と読める。右の道の奥は防寒のために駆け足運動をする眞知姐サン)



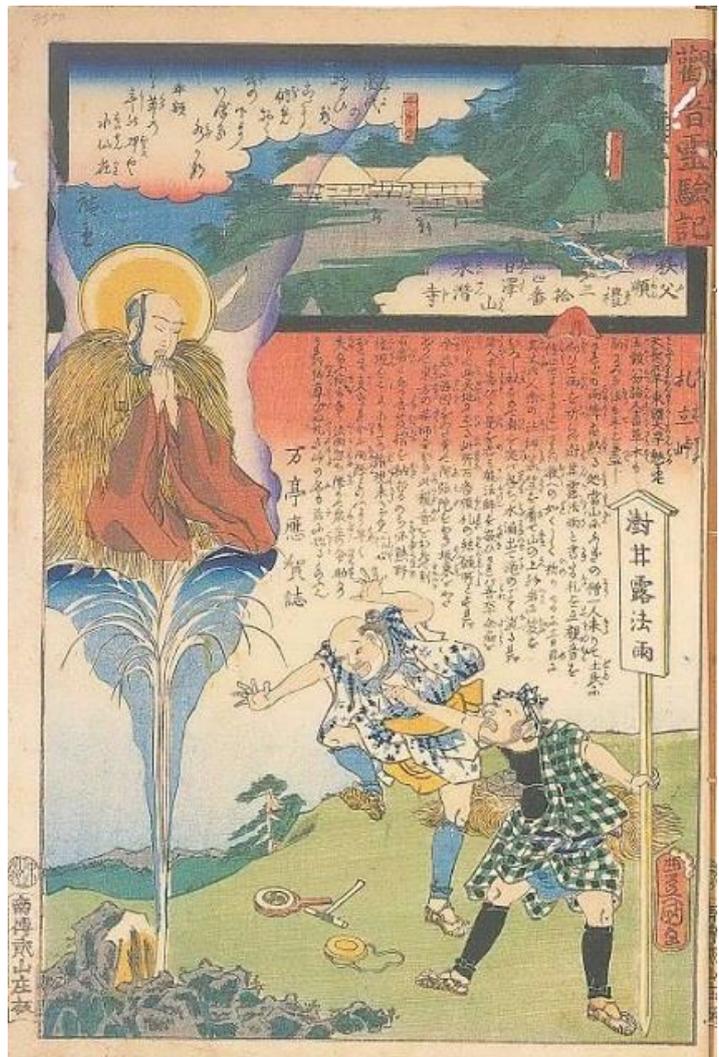
この寺の縁起は、観音靈験記によれば、旱魃に喘いでいたこの土地に或る日不思議な旅の法師が巡拝して来て言うには、「澍甘露法雨」と書いた札を立て観音を信心すれば滋雨も降ろうと教えた。

教えの如くして祈りけるに、三日目に其の丈六尺余の法師が、蓑笠を着て山の上の岩に笈を下し、杖を以て岩を突けば、忽ち水湧き出て滝のごとく流るれば、里人ら喜びて是を飲み彼の法師を敬いければ、我六十余州を巡りて此靈地に至る。此所を日本百番順礼の結願所とせよ。

この札を立てた所が今の札立峠であると・・・また、還俗の水潜りの泉水もこの杖から湧き出ているそう。

この種の伝承は日本各地にあり、法師は大抵は弘法大師である。マ、この寺もそのひそみ鬻に倣ったのであろう。

さて、この寺は結願寺であるから、巡礼を終えた人びとの金剛杖や菅笠、笈摺を納めた結願堂があり、また水潜りの胎内洞窟もあったが、その他に日本百観音寺の砂を納めた百観音御砂踏み場や、百観音功德車などの仕掛けも用意されていた。水垢離の胎内洞窟は崩壊の危険有として閉鎖されていて入れなかった。





(閉鎖されていた水潜りの胎内洞窟)



(釈迦如来の仏足石が刻まれた石碑、これは由緒ありそう⇒)



(秩父観音巡礼 33 札所を結願しましたが・・・)

(両先達に感謝申し上げます⇒)

【日沢山 水潜寺】曹洞宗 本尊：千手観世音菩薩

オン バザラ タラマ キリク ソワカ

【御詠歌】^{よるすよ} 萬代の 願ひをここに納めおく
苔の下より 出る水かな

(参詣日 2019/01/09)



へんげ (附) 代表的な観世音菩薩の変化

観世音菩薩（観自在菩薩とも言い、通称は観音菩薩、観音様）は、出家する前の釈迦の姿で現される。それゆえ、宝冠や装身具を身につけた優美で華麗な姿で現される場合が多い。

観世音菩薩は、衆生の悩み・苦しみを救うために 33 の姿に変化してこの世に垂迹される。それゆえ、西国観音巡礼も坂東観音巡礼も秩父観音巡礼も札所は全て 33 寺となっている（秩父札所は、日本三観音霊場巡礼札所を切りの良い合計百札所にすべく、1 寺増やして 34 寺とした）。

本稿の最後に、観音変化 33 姿の内、代表的な七変化の観世音菩薩の姿、画像と真言を付記しておく。

- 聖観世音菩薩 観世音菩薩の基本形。後の変化観音と区別するために、聖（正）が冠せられた
- 十一面観世音菩薩 頭上に頂く 11 の面がそれぞれ 11 種類の苦しみを救うと言われる
- 千手観世音菩薩 千の手は稀で、42 本の手が一般的。1 本の手で 25 の世界の人々を救うという。全ての掌に眼が刻まれていて、千手千眼観音菩薩ともいう
- 馬頭観世音菩薩 憤怒の形相で諸悪を喰い尽し厄災を除く。地獄に落ちた民や牛馬を苦悩から救う
- 准胝観世音菩薩 悟りを開き病氣平癒、子授け、安産などの現世利益をもたらす。六道で人間界を導く仏母とも言われ、一説にはヒンドゥー教のシバ神の女妃ドゥルガーの化身とも。このドゥルガーは日本にも渡来して古狐となり、妖艶な傾城「玉藻の前」に化けて往時の名君達の人心を色で迷わせた妖怪であるとも言われている。准胝像の理知的なご尊顔とは裏腹に、あな、恐ろしや、恐ろしや。准胝観世音菩薩を本尊とする観音寺院は、全国観音巡礼百札所の中では、秩父 5 番「語歌堂」、西国「上醍醐寺准胝堂」の 2 寺のみ。坂東 33 札所には無い。
- 如意輪観世音菩薩 6 本の手で六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の各界）の闇夜に彷徨える衆生を救う。頬杖をついて思案している姿は、衆生の救済策を思案している姿であるという
- 不空羂索観世音菩薩 手に持つ羂索を投げ縄のように投げて迷える衆生を救う。「不空」とは叶わぬ願いは無いという意味。全国観音巡礼百札所では唯一西国の「興福寺南円堂」の 1 寺のみ。



オン アロリキャ ソワカ
(聖観世音菩薩)



オン マカ キャロニキャ ソワカ
(十一面観世音菩薩)



オン バザラ タラマ キリク ソワカ
(千手観世音菩薩)



オン アミリト ドハンバ
ウンハッタ ソワカ
(馬頭観世音菩薩)



オン シャレイ ソレイ
ソندی ソワカ
(准胝観世音菩薩)



オン パラダ ハンドメイ ウン
オン ハンドマ シンダマニ
ジンバラ ウン
(如意輪観世音菩薩)



オン ハンドマダラ アボキャジャヤニ ソロソロ ソワカ
(不空羂索観世音菩薩)

【本項 引用仏像】

不空羂索観世音菩薩・・・東大寺三月堂、国宝

准胝観世音菩薩・・・・・・湖北黒田観音寺

上記以外・・・会津 33 観音

(極上の会津プロジェクト協議会 HP)

おわりに

秩父観音霊場巡礼も3ヶ月間掛けて結願したが、毎度のことながら霊験も御利益も顕れなかった。マ、何とか34札所を歩き通せて秩父の地に親しみ、また門前町での般若湯供奉ができただけでも良しとせずばなるまい。これも観世音菩薩様のお蔭であろう。

さて今年2019年は、残る西国三十三観音霊場・歩き巡礼の旅に出よう。

2019年1月

【巡礼の記録】 (出発地/到着地からの「一」は公共交通機関利用、それ以外は歩き)

- 第1回目 小川町駅—東秩父村～第1番「四萬部寺」—皆野駅—秩父駅 2018/10/13 日帰り
(歩行距離=15km)
- 第2回目 西武秩父駅～第2番「真福寺」、第3番「常泉寺」、第4番「金昌寺」、第5番「語歌堂」、
第6番「卜雲寺」、第7番「法長寺」、第8番「西善寺」、第9番「明智寺」、
第10番「大慈寺」、第11番「常楽寺」、第18番「神門寺」、第17番「定林寺」—秩父駅
2018/10/28(「武甲の湯」泊)～29 1泊2日 (歩行距離=25km)
- 第3回目 西武秩父駅～第12番「野坂寺」、第26番「圓融寺」、第27番「大淵寺」、第28番「橋立堂」、
第25番「久昌寺」—秩父駅 2018/11/28 日帰り (歩行距離=15km)
- 第4回目 西武秩父駅～第13番「慈眼寺」、第14番「今宮坊」、第15番「少林寺」、第16番「西光寺」、
第19番「龍石寺」、第20番「岩之上堂」、第21番「観音寺」、第22番「童子寺」、
第23番「音楽寺」 2018/12/08 日帰り (歩行距離=17km)
- 第5回目 西武秩父駅～第24番「法泉寺」、第29番「長泉院」、第30番「法雲寺」～秩父市街泊、
翌日第31番「観音院」(小鹿野) 2018/12/27～28 1泊2日 (歩行距離=24km)
- 第6回目 西武秩父駅～小鹿野・第32番「法性寺」～小鹿野温泉「梁山泊」泊～第33番「菊水寺」
～(この間のみタクシー利用)～第34番「水潜寺」—皆野駅—西武秩父駅—帰宅
2019/01/08～09 1泊2日 (歩行距離=15km)
- 第7回目 (補遺) 第32番「法性寺」奥之院 西武秩父駅—(小鹿野町営バス)—長若中学校前～
～法性寺～長若中学校前—西武秩父駅 2019/03/12

(了)